２０２２年３月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、前回の番組審議会での答申を受け「２０２２年度近畿地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０２２年度近畿地方向け放送番組編成計画」について説明があった。

会議では、事前に視聴してもらった、「大探検！誕生 大阪中之島美術館～魅惑のアート巡り～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　篠　雅廣（大阪市立美術館　館長）
委　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜「大探検！誕生 大阪中之島美術館～魅惑のアート巡り～」
（２月１１日（金）前８：１５～８：５８）について＞

○　Ｅテレで放送している「日曜美術館」のように、学芸員など美術館の人が出てきて解説をすることはなかったが、美術品のエピソードに限らず周辺エリアの情報が盛りだくさんで、意外に楽しめた。美術館のコンセプトにも大阪に貢献することが掲げられ、大阪のアーティストを中心に紹介していたのは、大阪局制作ならではの番組だと感じた。中之島エリアを「映えスポット巡り」ということで歩いていたが、「映え」ということばをＮＨＫが使用していることに若干の違和感があった。

○　中之島美術館全体の雰囲気もわかり、実際に行ってみたくなる内容だった。出演者のやりとりも楽しく、それぞれが「妄想」をしながら鑑賞を楽しんでおり、美術館の楽しみ方はひとそれぞれということが伝わりよかった。番組で使われていた「映え」という表現には違和感があり、違うことばでもよかったのではないか。また、美術館の構想から開館までが長期にわたった歴史やその背景について深掘りされているとなおよかった。

○　学芸員の解説よりも少し軽い感じで美術を鑑賞できる番組という印象を受けた。いくつかの作品について出演者の「妄想」を交えて解説していたので、人によって感じ方が違うことを実感でき面白かった。中之島美術館は構想から開館まで４０年ほどかかったと聞いているが、なぜそこまで時間がかかったのか、その変遷も解説してもらえるとなおよかった。

○　美術館だけではなく、中之島地区を丁寧に紹介することで、エリア全体で楽しむという視点になっておりよかった。平面的な絵画を鑑賞するだけではなく、人間浄瑠璃のように、パフォーマンスなどによる立体的な空間としての美術館の楽しみ方も紹介されており、中之島美術館の将来の可能性もうかがえるようだった。構想から開館まで長い時間を要したが、この番組を見て文化の活性化、維持には何十年もかかるということを実感した。

○　教養番組というより情報バラエティ番組として見たが、出演者・構成などあらゆる面でバランスがとれており、見やすくとてもよかった。アナウンサーの丁寧な解説に加え「妄想鑑賞会」という独自かつそれぞれの自由な視点やクイズも盛り込まれ、またアーティストや建築家の生の声も紹介されており、見る人を楽しませ飽きさせない工夫があった。三人一緒に鑑賞する場面だけでなく、各自が落ち着いて鑑賞する姿が最後に映っていたのはよかった。

○　番組の主眼が中之島美術館そのものなのか、美術館を含めた周辺エリアなのか、わかりにくかった。出演者の掛け合いで番組が進行したが、現場の専門家の話も聞けた方がよかった。また、中之島美術館が水害から人々や作品を守るため高い位置に建設されたという説明があったが、設備面でどのような工夫がされているのか知りたかった。

○　解説を最低限にして、出演者がそれぞれ作品の異なった解釈や感想を述べることで、アートは自由に鑑賞してよいということが伝わりとてもよかった。「中之島映えスポット巡り」からも、美術館そのものだけではなく周辺エリアも楽しめることがよくわかった。興味深かったのは人間浄瑠璃で、アーティストが、みずからの興味や疑問、好奇心に対して自分なりの答えを出そうと模索する探求の姿勢が印象的だった。ナレーションの大阪ことばは強過ぎて気になった一方、「映え」ということばは、個人が自由に発信できる時代になったことを象徴する新しいことばとして、わくわくする感じがした。

○　中之島美術館が開館したことを番組を見て知った視聴者も多いのではないか。美術館だけでなく周辺エリアの紹介があったことで、中之島エリアに足を運ぶきっかけになったと思う。妄想しながら作品を鑑賞することも面白い楽しみ方であると思うが、番組として放送するときは、情報の信頼性という観点から、正しい解説と鑑賞者の妄想との線引きをはっきりさせた方がよいと感じた。

○　大変おもしろい番組だった。3回視聴したが見るたびに見え方が違い、バラエティ感もあるが、学びもしっかりとあり、絶妙なバランスだった。飽きない理由としては、番組で取り上げているコンテンツの数や種類の豊富さがあると感じた。建築や所蔵作品、周辺情報、人間浄瑠璃など、どれか一つのコンテンツを取り出しただけでも番組として成立するのではないか。出演者もそれぞれの役割を果たしており、作品を製作したアーティストみずからが出演して話をすることで情報がリアルに感じられよかった。

○　個々のパートは面白く、気軽に見られるお茶の間向きの番組と感じた一方で、全体的に盛りだくさんであることから、番組としてのまとまりに欠けていたように思う。また、ナレーションの大阪ことばには少し無理があった。この番組に限らず一度大阪らしさを皆で考えてもよいようにも思うが、無理に大阪らしさを出そうとするのではなく、自然体で作ったほうが、多面性・多様性があり、温かみのある大阪らしさが出せるのではないか。

○　美術館と周辺情報の全体像がわかりやすい番組で、新しい美術館の船出を楽しく見ることができた。キャスティングもよく、タレントが言っていた「妄想鑑賞会」と

いう楽しみ方からは、作品を見た人の多様な意見を知ることができ、視聴者の好奇心をくすぐったのではないか。コロナ禍の息苦しい中で、初春に開館した新しい美術館への期待を喚起しておりよかった。

（ＮＨＫ側）

この番組は、アートの入門編としてすそ野を広げて、堅苦しくならないように美術館と周辺エリアを楽しんでもらいたいと思い制作した。館内や作品だけでなく美術館のある中之島エリアの情報も含めて、旅感覚でも見てもらえたのではないか

（ＮＨＫ側）

「妄想鑑賞会」として、自分の思ったとおりに作品を鑑賞してよいというメッセージを込めることで、美術系の番組を敬遠してしまうような人にも、意外とおもしろそうと思ってもらい、実際に美術館に行きたくなるような番組を目指した。また、スマートフォンでの撮影が楽しくなるような仕掛けとして「映え」ということばを使った。番組前半は間口を広く多くの人に興味を持ってもらい、後半は美術品のより専門的な見方を紹介するなどバランスをとった内容で構成した。

＜放送番組一般について＞

○　２月２７日(日)の「第１０回大阪マラソン・第７７回びわ湖毎日マラソン統合大会」(総合 前 9:05～11:54) を見た。最初はびわ湖の風景が見られなくなるのは残念だと思っていたが、放送では大阪の風景がきめ細かく映っており、落ち着いた実況で風景も解説されていてよかった。

○　３月１６日(水)の「列島ニュース」を見た。ウクライナから留学生が来たという福岡のニュースは、ウクライナ情勢が心配される中で、日本に待避してきた方がどこの地域に居を定めるのか気になっていたのでよかった。引き続き、日本全体というくくりだけではなく、近畿地方とウクライナの連携や支援の動きについても伝えてほしい。

○　ウクライナ情勢については海外メディアのニュース映像が多く放送されているが、こういうときだからこそＮＨＫみずから得た情報が流れているかどうかが重要だと思う。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２２年２月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ開催）において、１１人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、１２月２６日(日)に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」についての調査結果を報告の後、最近の番組について報告があり、議事に入った。会議では、まず、「２０２２年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「２０２２年度近畿地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、事前に視聴してもらった、ＮＨＫスペシャル「見過ごされた耐震化～阪神・淡路大震災 建物からどう命を守るか～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長	帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員	安達　えみ（合同会社　樋　代表）
	井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
	黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
	佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
	笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
	藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
	堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
	前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
	矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜「２０２２年度近畿地方向け地域放送番組編集計画（案）」について－諮問－＞

○　諮問された「２０２２年度近畿地方向け地域放送番組編集計画(案)」については、これまで委員から出された意見の趣旨が具体的な番組編成のうえで生かされることを前提に、番組審議会として原案を可とする答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜ＮＨＫスペシャル
「見過ごされた耐震化～阪神・淡路大震災 建物からどう命を守るか～」
（１月１７日(月）後１０：００～１０：４５）について＞

○　住宅ではなく「ビルの耐震化」というのはよい着眼点だと思った。大きな災害のたびに制度や対策が見直されてきているのだと思っていたが、まだ十分ではないところや、改善の余地があるということを知り、勉強になった。企業ビルの名前といった固有名詞の表示についてはどう判断しているのか。

○　このような放送が、定期的に震災のことを考える機会になっていてありがたい。梅田の雑居ビル火災もそうだが、暮らしに潜む身近なリスクが紹介されていてよかった。高知県における補助制度など他地域の事例を見ることで、自分の住んでいる地域はどうだろうと調べるきっかけにもなった。また、防災は重要なテーマであり、深刻な雰囲気になりがちだが、恐怖ばかりではなく、子どもを含め楽しみながら見て学べるような工夫もあるとよいと思った。

○　阪神・淡路大震災は実際に体験し今でも強く記憶に残っているが、ビルの耐震化について取り上げた番組は初めて見たように思う。その対応が遅れているという点はショックであるとともに、地域防災においても新しい提言のあるよい番組だと思った。そのうえで「どう命を守るか」については簡単な問題ではないし、番組でも具体的な解決策が示されているとは思えず、やや恐怖心ばかりが残った。

○　見過ごされてきたビルの耐震という問題を科学的に考えるとてもよい番組で、未来を考えて過去を振り返る、充実した問題提起になっていた。映像やデータを使ってわかりやすく制作されていた。高知の例もよかったが、取り組みが進んでいる地域とそうでない地域で、住民の危機感や行政の意思決定などにどのような違いがあるのかもわかるとより深みが増すと思った。

○　厳しい現状を伝えつつ、解決に向けた実例を交えて構成された良質な番組だ。特に解決へのヒントともいえる３つの実例に非常に価値があり、この部分をより多くの人に見てもらうことが重要だと思う。「経験したことのないことへの対策は苦手」「まずは市民の意識改革を」といった専門家の意見も適切かつ納得できるものだった。一方で、現状に関するパートはある程度想定内の内容だったため、もう少しコンパクトにまとめて、解決へのヒントに時間を割いたほうがよかったのではないか。

○　焦点がぼやけた番組に思えた。また、条件が大きく異なる、新橋のビルの話と高知の話が同じ流れの中で語られることに違和感があった。ハードの改善を行政に訴えていくべきか、人の行動を変えるべきかなどといった解決策の扱いも雑に感じた。

○　タイトルを含め、耐震化というすっかり身近になったと思っていたテーマについて、ビルについてはできていないということを知り驚いた。アンケートによる関係者の本音とともに、「人間は起きてないことへの対策は難しい」ということばが心に残った。全体のバランスとしては、先進的な事例をより手厚く紹介するとともに、事前に対応したほうが事後よりもコストが削減できるということも、よりしっかり伝えられればよかった。建物の所有者も利用者も他人事になっているというところはふに落ちたし、みんなで自分ごとにすることが大事だと思った。

○　日常生活であまり認識されていない商業・オフィスビルの崩落に関するリスクについて、ＣＧなども使ってわかりやすく伝えており、視聴者への啓もうという意味でも有意義だと思った。昼間に阪神・淡路大震災が起きていたら、という話については被害の具体的な試算があってもよかったのではないか。学校や病院以外の建物には耐震診断結果の公表義務がないという話についてはどういった理由によるものなのか気になったが、利用するビルのリスクがユーザーに一目でわかるような枠組みが整えられれば、耐震化を後押しできるのではないかと思った。

○　これまでにも震災関連の番組はたくさんあったが、ビルの耐震という着眼点は珍しく、見応えがあった。民放にはない周到な調査と取材のたまものだと思った。阪神・淡路大震災の発災時間が早朝だったことで住宅をビルの耐震化よりも優先したという話に、国の対応が対症療法的であるということに驚き、その経緯を発信したことは意義深いと感じた。ただ、今回の番組から考えると地盤や地形を考慮した新たな耐震基準が必要になるのではないかと思ったが、そういった指摘があればなお

よかった。また、いくつか解決に向けた事例が紹介されていたが、さらに多様な観点からの解決策が紹介されれば安心感が増すと思う。

○　阪神・淡路大震災から２７年という時の流れの速さを実感した。ビルの耐震化については忘れられていたというよりも、わかっていてもどうしようもないということでフタをしていたのではないか。そのフタを開けた意義は大きい。補助金の対象が限定されている点や自治体判断で改修実施された割合の低さなどがわかりやすく示されておりよかったが、予算や意思決定の仕組みについてはもう少し詳しく知りたいと思った。また、専門家の話にあった実態調査や、国の制度拡充、世論の形成といった問題の解決に向けた道筋については、今後の番組でさらに掘り下げていってほしい。

○　震災の記憶が薄れていく中、あらためて警鐘を鳴らすという意味でよい番組だった。ただ、インタビューした国交省ＯＢからはあの当時は仕方なかったというコメントがあったが、現職には取材ができなかったのか。

（ＮＨＫ側）

企業名などの取扱いについては、広告と取られる可能性はないか、視聴者にとって有益な情報かどうかなども考慮し、表示する回数を限定するなど工夫をして制作・放送している。

（ＮＨＫ側）

今回の番組は、８７％まで耐震化が進んでいる住宅に対し、ビルについては実態がわからず、耐震化診断の公表義務すらないのが現状で、多くの人はそれを知らないという点に警鐘を鳴らそうとした。国交省への取材については、今回は震災直後の法整備や耐震化政策策定の経緯に関わった人に取材する必要があると考え、現職ではなく当時の課長にインタビューした。今回のご意見を踏まえつつ、引き続き取材を進め、震災報道に取り組んでいきたい。

＜放送番組一般について＞

○　「ＢＳ１スペシャル」問題について、反省すべきところは反省してほしいが、賛否

のあった東京五輪を関西在住の河瀬監督、大阪局といった東京以外の視点でとらえることによって見えてくることもあるのではないか。今回の問題とは別に整理することで今後につなげてほしい。

○　この件が話題になった後で、番組の内容を確認しようと思ってもＮＨＫプラスやＮＨＫアーカイブスなどどこにも公開されていない。修正するべきところは修正するなどして、番組を見られるようにした方がよいと思った。

○　なぜ問題がここまで大きくなるのかが、経緯・説明を聞いても、真実がよくわからないと感じるが、今回の件で大阪局が意気消沈し、よい番組を作れなくなるようにはなってほしくない。特に大阪局は地方からの発信という点で大きな役割を担っており、まだ道半ばであると思うので、今回の件は今後の教訓としていかして、自信をもって前に進んでほしいと思う。

○　今後の再発防止策はこれでよいと思うが、システムやルールは作った瞬間から古くなるので絶えず見直していくことが大事だ。ただしルールによって、かえって視聴者の知りたいこと見たいこと聞きたいことが制作・放送されなくなるというおそれもあるので、現場が委縮しないようにしてほしい。

○　２月１１日(金)の「北京オリンピック　スノーボード　男子ハーフパイプ・決勝」（総合 前 10:05～後 0:33）を見た。平野歩夢選手が登場する場面でのサブチャンネルへの切り替えについて、周りでも残念だという声が目立ったので、今回を機に何か対応しようとしているならば知りたい。

（ＮＨＫ側）

ご指摘いただいた日以降、日本人選手の出場時刻を綿密にシミュレーションしてサブチャンネル含め切り替えのタイミングを早めに設定したり、また、総合テレビとＥテレの切り替え時には、一定時間同じものを放送しながらテロップを使って切り替えを促したりといった対応を行っている。

○　「らじる★らじる」の聴き逃し機能を使って「カルチャーラジオ　ＮＨＫラジオアーカイブス」（ラジオ第２ 毎週月曜 後 8:30～9:00）を聴いている。「声でつづる昭和人物史」がテーマだが、膨大なＮＨＫのアーカイブスの中から、何を選択し、ど

う伝えるのかというところに、メディアの見識や良心といったものが投影されており、番組を制作する現場の職員の気概や心意気といったものが、よく感じられる。ナビゲーションもすばらしく、必ずしも映像でなくとも、伝わるものは伝わるということを実感する番組だ。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２２年１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ開催）において、１１人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、１２月２６日(日)に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」の内容について報告があった。会議では、事前に視聴してもらった、クローズアップ現代＋「緊急報告・大阪ビル放火　現場で何が」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　樋　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜クローズアップ現代＋
「緊急報告・大阪ビル放火　現場で何が」
（１２月２０日（月）総合　後１０：００～１０：４５）について＞

○　短い時間に多くの方が亡くなったことがショックだったが、事件から３日ほどで制作された番組でありながら内容がまとまっており、ＮＨＫの取材力を感じた。番組内でも専門家が話していたが、犯人が人を殺そうとして起こした防ぎようがない事件でもあるので、「どう命を守るのか？」というテロップにはやや違和感を覚えた。火災の映像をＳＮＳに投稿した人や、隣のビルにいた人など第三者に対する取材を見て、自分のこととして考えない風潮や、他人に関して無関心であることが事件の根底

にあると感じた。

○　密室火災の怖さや専門家への取材、一酸化炭素が充満する様子のＣＧシミュレーションなど、事件があってから数日で制作されたにも関わらず誰がみてもわかりやすく、危機感を持つことができるよい番組だった。専門家の方が非常口の確認方法や鍵の開け方など個人で対策できることを話していたことが、最後の締めくくりとしてよかった。火災が起きたビルの前を取材陣が囲んでいたが、それが通行の妨げになっているのではないかと気になった。

○　番組では、階段が一つしかない古い小さなビルの密室性の怖さと、自殺願望を持つ容疑者心理の両面から事件の解説をしていたが、無関係の人を道連れにして死のうとする感情があることを知り、恐怖を感じた。スプリンクラーの設置が義務化されていない古いビルへの対策は、避難用の階段をつければ解決できる一方、他人を巻き込んで自殺したいという思いをうちに抱える人への対策は難しい。事件発生からたった３日で制作されたことに感心したと同時に、番組を見て模倣する人がいないか、危惧も感じた。

○　悲惨な事件だったが、画像やＣＧを使いながら火災の実態を多角的に分析するとともに、自分の身を守るために非常口や階段を確認する習慣をつけるべきだというメッセージもあってよい番組だった。日常生活に事件が潜んでいるということをひしひしと感じる社会状況のなかで、専門家の方が犯罪の質が変わってきていることも指摘しており勉強になった。他人を巻き込む犯罪に対してどうすればよいか考える番組も作ってほしい。

○　速報に近い番組だが検証性も重視しており、防ぎようのない犯罪にどう向き合い対処するかという難しいテーマを取り上げている質の高い番組だった。火災への対策では、京都市の消防局の例は重要であり、こういうことを広めていくことがマスコミの役割だと思った。出演していた２人の専門家のうち建築防災に詳しい専門家は、建築基準法規定に頼らず簡易な屋外階段や脱出装置などの手だてや、ホテルやレストランを利用する際に必ず避難経路を確認するといった具体的なことを言っていたが、犯罪心理学の専門家のコメントからは具体的な対策が見えなかったのが少し残念だった。

○　短期間で制作された番組ながらよくまとめられており、取材の方向性もよかった。一方、スタジオでの専門家とのやりとりについて、一部専門外の部分について質問をしており、やりとりが軽くなっていたのが残念だった。最近のこういった番組では、専門家などにオンラインで取材したりしているが、取材相手とのつながり、関係性を深めて、撮影・取材をすることも重要だと思っている。新型コロナウイルスのこともあり、なかなか人との関係性を築くのは難しい現状だが、つながりを大事にしながら取材や制作を進めてほしい。

○　どうしてそんな短時間で多くの人が亡くなったのか、火事による黒煙がいかに一瞬で人の命を奪うのかがわかりやすく説明されており、どうすればよかったのかを考えるのに役に立つ番組だった。専門家の方も言っていたが、例えばホテルに宿泊する際には必ず避難経路を確認してから休む、など簡単なことの積み重ねで救われることもあると思った。

○　わかりやすく情報がまとめられておりよかった。事件から日数がたってしまうと視聴者の危機感も薄れるので、発生から早いタイミングで放送されたことはすばらしい。ビルなどの火災では、番組内で言われていたように複数の脱出経路の確保が重要で、今回出演していた専門家による提言が法整備の契機になればと思った。私自身、ホテルに宿泊した際の脱出経路は確認していなかったが、考えを改めさせられるきっかけにもなった。一方で、時間がたつと徐々に危機感が薄れていってしまうという問題もあるので、継続的に対策をしていくことは難しいとも感じた。

○　番組の冒頭は、誰に何を伝えようとしているのかわからないと思いながら見ていたが、番組が進むにつれ多角的な観点から事件の全容が詳細に伝わってきて、理解しやすく内容の濃いとてもよい番組だと感じた。ビルの構造は法律に違反していないと番組内で言われていたが、法律というのは、どれだけ整えていたとしても悪事を縛ることはできない。法律に則しているという事実が、かえって人々の意識に漫然とした安心感を与えてしまっていると感じた。こういった犯罪を防ぐには、犯罪者を生み出さない社会のあり方を模索しないといけないし、そこをかいくぐってきた悪事について備える意識やノウハウを持たなければいけないと思った。

○　多くの方が亡くなった犠牲の大きさと、４０秒から１分ほどで煙や一酸化炭素が充満して命を奪うというシミュレーションからビル火災の恐ろしさが伝わって

きた。通院していた患者が言っていた「先生が死ぬのはおかしい」ということばは本当に切なく胸に残った。この特殊な事件を３日間ほどで番組にしており、速報性が高いと同時に、どう自分の命を守るのか、残された患者たちの心のケアをどうするかなど多くのことを投げかけている番組だ。このような犯罪の最近の特殊性として、犯人が自分はどうなってもよいと考えているところに大きなターニングポイントがあると言われていたが、それらの社会的背景や要因についても報道することを期待している。

○　短期間で制作されているが、速報性を大事にして構成されていたのでわかりやすかった。過去の京都アニメーションや新宿歌舞伎町の火災の事例も出しており、事件の特殊性と普遍性の比較や、ビルの構造が法律の網からこぼれ落ちてしまうことがあるという事例も紹介されていてよかった。

（ＮＨＫ側）

発生当初は、火災の起きた状況や被害を大きくしたビルの構造の問題について伝え、事件の可能性があるとわかってからは容疑者の犯行時の状況や犯行前の行動などについて取材し、連日、関西および全国向けのニュースで伝えた。遺族の方々への取材のあり方だけでなく、事件現場は都市部の人通りの多い場所となるので、新聞社やテレビ局各社と十分協議して、カメラの台数制限などを決めて取材を進めた。この事件は、さまざまな課題を含んだ事件であり、今後とも取材を継続して伝えていきたい。

（ＮＨＫ側）

短い期間でその時点でわかっていることを多角的に伝えたいと思い、取材内容のＶＴＲにスタジオ解説、中継を交えて放送した。スタジオに出演していた専門家から具体的な対策を提示できてよかった一方で、質問の内容や方法などについては、より視聴者に伝わりやすいように引き続き工夫をしたい。

＜放送番組一般について＞

○　「ＢＳ１スペシャル」問題について、経緯や今後の防止策に関する報告を聞いて、全職員が一丸となって対策を進めていくという決意も分かった。

○　１１月１８日（木）の「えぇトコ　笑売繁盛！えびすの町に福きたる～兵庫・西宮市～」を見た。旅人の２人は、にぎやかなイメージがあったが、組み合わせが新鮮でおもしろかった。２５分の番組で５か所ほど、さまざまな人や場所を紹介していたが、それぞれ親子関係や人間模様、なぜ西宮に来たのかといった人生まで丁寧に取材し、詰め込みすぎずまとまっていて大変見やすかった。案内人が２人だったが、あえてにぎやか過ぎる感じを抑えた演出なのか、ナレーションが多かった印象をうけた。

○　外国から来て起業をされている人や、家業を継いだ人、職人などさまざまな暮らしをしている人々が取り上げられていてよかった。レモンパイを作っている洋菓子店の方がずっと変わらない味を作ろうとする姿勢から、次世代のことも考えてものづくりをしていくことの重要性を再認識した。

○　長く居住している関西でも行ったことがない、よく知らない土地が多いことに気づかされる番組だった。西宮で知っているのは甲子園や夙川あたりで、武田尾温泉が西宮にあることは知らず、またかやぶきの家があることも驚きで、本当に広い地域だと感じた。昨年は和束の茶畑や高槻の古墳を紹介していたが、実際に行きたいと思わせてくれるよい番組だった。

○　住んでいる人でも知らない情報があり、地域の魅力発信としてほほえましくよい番組だった。紹介されていた中華料理店が阪神・淡路大震災の時に食事を支援したという話は震災の記憶を語り継ぐ上で大事だ。また、洋菓子店の紹介では、代々受け継がれてきた味が西宮にも存在するということがわかり、地域の魅力を伝えていた。旅人の２人もにぎやか過ぎずに適度な明るさで大変好感を持って見た。

○　コロナ禍で旅行に行くことが難しいため、自身が旅行しているような楽しい気分にさせられよかった。西宮が南北に広いことは知っていたが、改めてその広さを実感させられた。中華料理屋も和ろうそく屋も阪神・淡路大震災とのかかわりを話しており印象的だった。

○　２５分の番組とは思えないくらい丁寧で見応えがあり、冒頭で「色とりどりのえびすタウン」と言っていたように、食べているところも含めてにおいも空気も味もして

くるようなすてきな番組で感動した。ただ、最後に紹介されていた武田尾温泉については、それまでの場所と違ってほんの少ししか取り上げられておらず残念だった。露天風呂の風景などがあればなおよかった。

○　にぎやか過ぎないタレントが旅人を務めており、雰囲気に合っていて番組内容に集中でき、楽しく見た。西宮の船坂というエリアが宝塚に隣接していることを全く知らず、ローカルの旅番組はこういったうれしくなる発見があるのでよかった。

○　番組では世代間の交流が表現されており、そういった営みが街の文化や歴史を育んできたのだなと感じた。ナレーションがきちんとあることで、単なるバラエティー番組にはない品格や風情がある。一方で、このような番組がその土地に興味がある人たちにきちんと届いているのか疑問に感じる。放送は不特定多数に伝達できる一方で、本当に興味がある人と結びつきやすいとはいえないので、興味を持っている人たちにしっかり届けられる仕組みがあればより多くの人に見られるのではないか。

○　２人の旅人がコミカルでありながらも、ナレーションが中心になっていたので全体がとても上品な番組に仕上がっていた。西宮の一般的に持たれているイメージとは異なる伝統工芸や自然の豊かさを知ることができ、食についても家族のあたたかさを感じる庶民的なお店を紹介するなど、多様性に富んだ番組だったと思う。旅人がお店を「自由が丘っぽい」とコメントしていたが、西宮は西宮であり東京や他の地域と比較する必要はないと思った。

○　西宮は、幅は狭いが縦に長いので、自然の多様性がおもしろい土地だ。旅人である芸人の２人も、にぎやか過ぎず落ち着いてナビゲーターの役割をしておりよかった。気になったのは、冒頭、２人が鳥居をくぐっていたが、鳥居やお寺の三門をくぐる際は一礼をすべきなので、礼儀やたしなみをさりげなく表現してもらえると、さらに大人な番組だと感じられると思う。

（ＮＨＫ側）

この番組は、2012 年４月に放送を開始し、まもなく１０年を迎えるが、コロナ禍の気軽に旅に出られない今だからこそ、いつか行ってみたいと思える旅番組を、感染対策をとりながら制作している。毎回異なる

旅人２人が関西各地の知られざる味や技、絶景を訪ねながら、そこに暮らす方たちと触れ合って、思いや人生に耳を傾けながらその街のすばらしさに出会い、心を動かす番組を目指している。旅人もにぎやか過ぎず、押しつけがましくなく、地元の方々のことばや気遣い、暮らしぶりが伝わるように制作している。

（ＮＨＫ側）

旅番組は、準備をあまりせず、現場に行って見て聞いて感じたことをお伝えする手法もあるが、現在はコロナ禍でその形が難しく、ある程度準備をした状態で撮影に臨まざるをえないため、常に最適な形と内容を考え制作している。旅人によるコメントとナレーションについても、ライブ感としっかりした説明のバランスを大事にし、その都度より伝わりやすいよう検討している。

○　年末年始の番組編成について、最近は民放・ＮＨＫ問わず、ドラマの一挙再放送や過去の好評番組を再放送する傾向がよくみられる。年末年始こそテレビ局にしかつくれない強いコンテンツを発信すれば、テレビから離れてしまった人も戻ってくるのではないか。

（ＮＨＫ側）

この年末年始は、過去の名作ドラマや「ドキュメント７２時間」などを一挙放送したが、在宅する時間が長くなる時期に、普段テレビに接しない方にもＮＨＫの番組を視聴いただけるきっかけになればと思っている。もちろん新作番組を放送するという方法もあるので、ＮＨＫとしても大阪局としてもどのように年末年始の放送を展開するか引き続き検討を重ねたい。

○　１月２日（日）の「土方のスマホ」（総合 後 5:13～5:48）を見た。テレビを見ているがスマートフォンを見ているようであり、また短い時間の番組ながらもおもしろかった。

○　１月１７日で震災から２７年を迎えた。なぜ阪神・淡路大震災から２７年たっても、これほどまで多くの人が携わってくれるかは、現場の記者たちが、震災経

験者の自分たちのようになってほしくないという思いをうけて番組を発信しているからだと思う。震災をリアルタイムでは知らない記者も増えたが、神戸に来て先輩記者たちから教えてもらいながら取材を通して勉強し、自分でこうしていこうと思いをもつこともよく目の当たりにしている。速報性がある番組だけではなく、取材を積み重ねて放送することも大事にしてほしい。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２１年１２月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ・対面開催）において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、京コトはじめ「錦秋の彩り　京の紅葉」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　　篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　　安達　えみ（合同会社　樋　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜京コトはじめ「錦秋の彩り　京の紅葉」
（１１月１９日（金）総合　後２：１０～２：５５）について＞

○　大覚寺からの生中継をベースにしながら、収録映像でも京都の紅葉の名所を紹介していたが、収録映像のクオリティーが高く、生中継の必要があるのか疑問にさえ感じた。ただ、現在のような外出しづらい状況で、全国の視聴者が同時刻に京都の風景を感じられることはよいと思う。また、右上の目立つ場所に常に「錦秋の彩り　京の紅葉」とテロップが入っていたため、視線がいってしまい気になった。

○　ゆったりとしたテンポで見やすく、高齢層に向けた番組だという印象を受けた。紅葉を見に行けない人、紅葉を見に行こうとしている人のどちらに対しても、現在の色づき具合がわかり、生中継ならではの情報だと感じたが、収録の映像につ

いては、それがいつ頃のものなのかの説明があってもよかった。また、写真家の方が、カメラで撮影するときは広い画角で撮ったほうがよいとアドバイスをしていたが、現在はスマートフォンで撮影する人も多いので、その実演を交えたほうがより役に立ったと思う。

○　単純な京都の紅葉の名所紹介だけではなく、料理や写真の撮り方についてのアドバイスも織り交ぜており内容が濃かった。また、京都の秋は庭の配置など、技巧的すぎない程度に人の手が加わることで、見る人を楽しませるということも伝わりよかった。保津川下りはそこまで見事な色づきではなく、錦秋の彩りとまではいかず少し残念だったが、自宅にいながら京都の紅葉を見られたことはよかった。

○　京都の紅葉は有名な観光地でなくとも美しいこと、年によって色づき具合に差があることを京都在住の方の視点から発信したことは大変よかった。中継をしていた大覚寺の紅葉は、撮影の時期もあったかと思うが真っ赤ではなく、だいだい色だったのが少し残念だった。京都の紅葉の美しさの理由について、歴史的背景や、人の手が加わっていること、寒暖差が挙げられていたが、日照時間や土壌など、ほかの科学的な理由からも解明していくとおもしろいのではないか。

○　あえて間をしっかりと取っていて、のんびり、ゆったりとした雰囲気がよく、出演者の人選もよかった。建築と自然の調和が京都の紅葉の真髄だと思っており、その点を踏まえた写真の取り方のアドバイスについても非常に興味深かった。大覚寺からの生中継だったが、まだ色づき始めで時期的には少し早く、また保津川下りについても同様で残念だったが、逆に見頃を過ぎてしまう場合もあるので、時期の見定めは難しいと感じた。「Ｃｏｒｅ　Ｋｙｏｔｏ」の映像もきれいでよかったが、生中継では見られなかった大沢池の逆さモミジの映像も入れられたらなおよかった。

○　今年は紅葉の時期が遅く、生中継できれいに色づく紅葉が見られなかったのは残念だった。そのことについては、番組内で率直に伝えても良かったのではないか。また、ＮＨＫの持つ過去の映像をより多く使って、きれいな紅葉をみてもらうことに重点を置いてもよかったと思う。

○　これまであまり興味もなく、紅葉を見にいく習慣もなかったが、澄んだ空気と京

都の紅葉の美しさが映像から伝わり驚いた。山の紅葉だけでなく、人の手が加わり整えられた空間が美しいこと、京都ではそれがいろいろな場所で楽しめることがわかり行ってみたくなった。出演していた写真家や料理研究家の話にもあったように、京都の紅葉は文化に溶け込み、衣食住に入り込んでいることを学ぶことができる贅沢な番組だった。

○　紹介されていた京都の各所は景色も壮大で美しく、実際に行ってみたくなった。写真の撮り方についてのアドバイスは、光や色、角度などのポイントを提示しておりよかったが、口頭の説明だけでは伝わり切らないと思うので、文字やイラストなどの例示があればよりわかりやすかったのではないか。

○　品格があり、４Ｋや８Ｋなど高画質で見たいと思える番組だった。アナウンサーを含め出演者からは、番組の内容や雰囲気にふさわしい味が出ていた。深まった秋の映像が美しく、まるで京都を旅しているかのように感じられ、実際に行きたいと思えた。ただ、出演者がいる大覚寺の茶室では、椅子に座っていたり、パーティションが置かれていたので、しかたない部分があるもののせっかくの美しい借景がもったいなく興ざめした。京都を扱うコンテンツとしてはすばらしく、毎週色々な切り口で制作できると思うが、京都以外の近畿各地の「コトはじめ」も見てみたいと感じた。

○　テレビでしか見られない年配の方にとっても、さまざまな角度から美しい紅葉を見られるよい秋の番組だった。単に景観の美しさだけではなく文化の視点が盛り込まれているのが印象的で、朽ちるものに美を見出すという日本人の美意識、自然とともに生き、暮らしに取り入れ愛でるという日本人の精神をしみじみ感じさせられた。出演していた料理研究家の方は華やかでおしゃべりが上手く間合いもよかった。京都の美しさと日本人の文化や心を紡ぐ大切な番組だと思うので、これからもこういう番組を進化させて発信してほしい。

○　大沢池の水面が静かであれば、逆さモミジが映ると説明があったが、早朝や風が吹いていないときの逆さモミジの映像も差し込んでもらえるとわかりやすかった。ドローンの映像もあって、モミジの重なり具合もよくわかり、視覚的に楽しかった。六義園からの中継は京都の秋との関連がわからず、なくてもよかった。保津川下りの中継で、屋台船がでてきたが、千年の昔にタイムスリップして同じ川の流れや紅

葉を追体験できるところには不粋なので映さない方がよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

この番組はことし春から放送が始まった大阪局制作の生放送番組であり、その時々の情報をゆったりと、あまり詰め込みすぎない形でお伝えしている。京都の名所を中継地点として寺社建築、禅、料亭、着物、和菓子などの京都で生まれた日本の伝統文化を、職人の方々に出演いただいてその方々しか知らないことについて話をうかがいながら紹介している。また、生中継の映像だけでは伝えきれないこともあり、大阪局で以前から制作している「Ｃｏｒｅ　Ｋｙｏｔｏ」の美しい映像を活用して、京都が育んできた美の世界を紹介するようにしている。日本文化を見直すきっかけになるような番組を引き続き制作していきたい。

（ＮＨＫ側）

今回は、生中継で京都の紅葉の美しさを伝えたいと考え制作した。紅葉が盛りではなかったことは懸念していた点だが、色づき始めの紅葉を見て、実際に見にいきたいと思っていただけたのではないか。全国に紅葉の名所はたくさんあるが、なぜ京都の紅葉は特別な存在として人を引き付けるのかを主題にして重点を置き、自然と京都の美意識との調和が美しさを生み出していることを伝えようとした。そのため、ＶＴＲでも自然のものだけではなく人の手が入った、神社仏閣の紅葉を中心に紹介した。

＜放送番組一般について＞

○　１１月７日(日)の「日曜美術館　よみがえる天平の息づかい～第７３回正倉院展～」を見た。今回の展示のメインとなった宝物をまんべんなく、押さえておくべきところを広く紹介しておりよかった。出演した小説家の方が、大学時代に研究していたことも紹介されていたが、事実を基に研究を重ねることと、事実をもとにフィクションをつくることの両者の視点でコメントをしておりよかった。芯が特殊な天平筆を、実際に再現して試し書きしてみた結果、光明皇后が書いた筆跡に似ていたことは、展示会場ではわからなかった部分なので、勉強になった。

○　螺鈿（らでん）の楽器や、蓮（はす）の花の形をした宝物などすばらしい美術品と並んで、特によかったのは正倉院文書だ。解説が入ることでありのままの役人の報告書だということがわかるとともに、下痢になっただとか休ませてほしいといった内容の報告書が千年以上たって、宝物となっていることのおかしみや不思議さを感じた。出演していた正倉院事務所長のコメントも面白く、実際に展覧会に行くだけではわからない楽しみがちりばめられていた。

○　実際の会場ではガラス越しでもあり細部まで見ることは出来ないが、この番組ではテレビならではの至近距離で宝物を見ることができよかった。番組内で「今年も天皇からの勅使が～」とナレーションが流れた時に、天皇ではなく陛下と呼ぶのではないかと思った。

○　一つのテーマに特化して詳しい人同士が語り合うという、ＮＨＫらしい番組でよかった。ＮＨＫはさまざまなコンテンツがあるなかで、この番組のようにテーマを掘り下げることに特化していってほしい。そのためには作り手側も勉強して知識を身につけなければいけないが、最近ではどうしても手早く制作するようなこともあるように思う。一つのテーマに特化した番組には、視聴者も感心するし、勉強にもなるが、そういうことをＮＨＫに求めている人もたくさんいると思うので、このような番組を多く放送してほしい。

○　文書や筆にフォーカスしたＮＨＫらしい番組でよかった。巻物や文書は会場に行ってもあまり見ないが、そこにある背景を理解していれば違った見方ができる。今後の博物館の楽しみ方を改めて考えさせられた。ただし、正倉院展に全く行ったことがない人や興味があまりない人向けに、もう少し正倉院の概要を紹介してもよかったのではないか。また、太い有芯筆が職人によって再現され、使用感が絶賛されていたが、そのようなよいものがなぜ今はあまり使われていないのか、その理由の説明があってもよかったと思った。

○　映像でしか見ることが出来ない美しさがあることに加え、宝物の映像だけでなく筆の実験や科学的な分析などによって、番組の深みが増していた。出演していた正倉院事務所長の解説も、例えがおもしろく、愉快でフランクな表現で楽しめた。

（ＮＨＫ側）

正倉院展は今年で７３回目の開催となったが、1977 年の第３０回から、奈良局では毎年この番組を制作している。番組を作るうえで奈良局が大切にしていることは、正倉院展が奈良の人にとって特別な思い入れのある展覧会だということだ。今年はコロナ禍で、展覧会の来場者は例年より少なかったが、現地に来られなかった方々に、番組を通して宝物を楽しんでいただくことが出来たと思っている。

（ＮＨＫ側）

今回出陳された品目には古文書や筆記具が非常に多かったが、これらはもともと宝物だったというよりは、天平の時代に生きた人たちの証といったものであり、今も昔も人の営みは変わらないということを今回のテーマとした。正倉院事務所の方に出演いただき、出陳の理由を直接聞くことで、天平の人たちの息づかいが伝わったと感じている。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１９日(金)の「おうみ発スペシャル　滋賀のこれからを考えるＴＶ『キャンパスで会おう！』」(総合 後 7:30～7:57　滋賀県域)を見た。「滋賀はこれから！」がキーワードとなっていたが、コロナ禍における学生の窮状などについては、滋賀県だけでなく全国で同様のことが起こっており、困っている人のための取り組みが行われていると思うので、各地の取り組みが知りたいと思った。

○　意外にもドラマ仕立てで驚いたが、とてもよかった。コロナ禍の学生は、友達と会うことができず、部活もできないまま過ごしているという等身大の悩みや思いが伝わってくる番組だった。最後はサプライズの花火が上がり、希望を見いだせるなど、短かったが中身が濃いドラマに仕上がっていた。

○　コロナ禍の学生生活を題材にドラマを制作したことは大変よかった。行政と大学が手を携えて学生を支援したことも大変勉強になったが、滋賀県以外の地域でも同様にある取り組みなのか気になり、独自の取り組みであれば、ぜひ全国に発信してもらいたいと思った。一方、この番組では対面での授業がよいというのが学生の意見だったが、オンライン授業の良さを考える番組があってもよいのでは

ないかと思った。

○　ドラマでは学生を取り巻く状況が淡々と描かれていたが、実状を知っている身としては、本当はもっとせっぱ詰まった状況だったことを知ってほしいと思った。オンライン授業の難しさも、映像が突然止まってしまったりとコミカルさを交えて伝えていたが、困窮の様子も含めて、もう少し深刻さが伝わった方がよかった。

○　コロナ禍の学生に焦点をあてており、自分にとっても身近なテーマで興味深かった。滋賀県出身の俳優さんたちのことば使いなどからは、あたたかい雰囲気を感じるドラマだった。コロナのような制御が出来ない事象によって勉学が制限されることは見ていて辛いものがあったが、サプライズの花火によって希望を持つなど、ドラマを見ている人も元気づけられたのではないかと思う。滋賀県向けの放送だったが、テーマとしては全国どこでも通じるものがあるので、全国向けに放送してほしい。

○　大津局開局８０周年記念と聞いて期待して見たが、コロナ禍で苦悩する学生とそれを支える大人たちを描こうとしているのであれば、ドラマという形態にこだわらなくてもよいと思った。ドラマとして制作するのであれば、冒頭に実際の窮状を経験した人が話すなどして、よりメッセージ性を強くしてほしかった。

○　リアリティ、孤独、ユーモアと希望が全部凝縮されたようなドラマだった。主演の俳優がベッドで目を閉じているシーンからは、学生の孤独感をリアルに感じられた。また、コロナ以前は賑わいを見せていた琵琶湖の孤独も感じられるストーリーだった。今はどこの大学でもどう学生を励ますか、とにかく１人でも学業を断念しないで、という思いで努力をされているが、これからのキャンパスがどうなっていくのかというメッセージを残した番組だと思うので、ぜひ全国に発信してほしい。

○　学生の窮状が現実と近く、テーマも時事的でどこの地域でも起きていることだと実感し、若い人が将来に希望を持てないような環境は放っておけないと思った。

（ＮＨＫ側）

このドラマは、滋賀県の課題を深掘りしてこれからのことを前向きに考えていこうという趣旨で制作している「滋賀のこれからを考えるＴＶ」の５回目として放送した。大津放送局開局８０年を記念しての制作だったが、この２年間のコロナ禍がどんなものだったのか、滋賀の人たちがどう乗り越えてきたのかを振り返ることができるようなドラマとした。学生や先生方に取材し、コロナ禍で学生が何を考えて、どう生活を送っているのかを実際の体験に基づいて描くとともに、地域の人により身近に感じてもらえるよう、滋賀出身の俳優を起用し、日常生活に密着した滋賀の魅力を多く盛り込んだドラマになっている。

（ＮＨＫ側）

ドラマを作るにあたっては、この２年間人々がさまざまに支え合ってきたことをもとにストーリーを作っていったが、学生たちへの取材の中で、喪失感を持っている方がたくさんいることがわかり、それをドラマの主軸として据えた。なお、平日夕方の滋賀県向けニュース番組では、ドラマを５回に分けて放送し、ドラマの内容に合わせ実際に起きた出来事をニュース映像で伝えながら、この２年を振り返るという取り組みもした。大津放送局としても引き続き学生たちに関わっていきたい。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２１年１１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ・対面開催）において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」第１週を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　　篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　　安達　えみ（合同会社　樋　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」第１週
（１１月１日（月）～５日（金）総合　前８：００～８：１５）について＞

○　100 年の物語を３人の主人公で描くことは今までにない新しい切り口で面白いと感じた。テンポよく進むが、話がわかりやすく内容も濃かった。配役も意外な俳優を起用しており驚いた。これからも楽しみだ。

○　第１話の冒頭がモノクロのシーンで始まり、主人公の安子の成長にあわせて少しずつ映像の色彩や画質を変えながら、時代の移り変わりを表現しているのは面白かった。印象的だったのは食事のシーンで、家族や弟子たち大勢で一つの食卓を囲み、そこにラジオがあるということがいかにも昔の家族という風景でよかった。当時は今より人気があった和菓子とラジオという同じ境遇の２つのものが、

今後100年間の物語でどういう存在になっていくのか楽しみだ。

○　今回の連続テレビ小説は今までのように１人の主人公の一生ではなく、初めて３人の女性が主人公で、それぞれが時代をどう生きていくのかを描くということで興味深い。半年で３人の女性が登場するためか話のテンポが速く、子役が２話目の終盤でもう大人になっていたが、連続テレビ小説は毎回子役の演技が素晴らしいので、もう少し見たかった。ナレーションも意外なキャスティングで、名前を見なければ俳優だと気づかなかったが上手で、主題歌についても、歌詞は切ないものだが圧倒的な歌唱力がとてもよかった。

○　しゃれたタイトルからは、近代の女性史の理解を深めるという内容が読み取れ、今後も楽しみだ。バックに流れていたピアノがレトロな雰囲気をより醸し出している。今回も一般市民が戦争とどう関わるかが描かれると思うが、戦争を知らない世代に対して、その大変さを伝える意味で連続テレビ小説が戦争を描くことは有意義だ。出征の場面について、多くのドラマでは万歳三唱で送り出すところが表現されるが、このドラマでは家族が緊張して見送る様子がうかがえ、リアリティーがあってよかった。

○　コミュニティーラジオを取り上げた前作の「おかえりモネ」、ラジオの創生期を取り上げた今作と、偶然かもしれないがラジオが題材の作品が続き興味深い。音だけのコンテンツは視覚情報以上に想像力が必要で、だからこそ深く心に刻まれると感じるが、コロナ禍で「持たない暮らし」への原点回帰があったようにも思え、ラジオをはじめとする音声メディアの可能性は広がったのではないか。作中に流れるルイ・アームストロングの「On the sunny side of the street」も非常に印象的で、劇中で使われるラジオ番組を含め、音のコンテンツの魅力が存分に出ていると思った。

○　連続テレビ小説は、多くの人がプライドを持って制作し、民放にはないＮＨＫならではの歴史的な番組だと思っている。今作も話が展開するのはこれからだと思うので楽しみだ。今後、放送と配信という関係の中で、ＮＨＫならではの作品をどう発信し社会や視聴者に還元していくのかが今後の課題になっていくと思う。

○　今回の連続テレビ小説も周囲の人たちの間でとてもよくみられている。みんな毎日ドキドキしてみていると聞き、連続テレビ小説は日本の朝を平和にしていると感

じた。物語のテンポは早いが、少しずつ成長していく子供から少女への移りかわりが当時の社会のなかでとても丁寧に描かれている。ほっとする幸せな朝の１５分を与えてくれていると思う。

○　子供時代の安子の幸せそうな笑顔に、見ているこちらも幸せな気分になった。現代は些細なことでは幸せを感じにくいように思うが、ドラマでは古きよき時代の幸福感が感じられた。物語のテンポがよく、もやもやした感じが次回に持ち越されることもないので見やすいと思う。実体験としても、ラジオ英語講座におけるテキストは画期的な発明だと思うが、この当時すでに存在していたのか気になった。今後は英会話との関わりを３世代にわたって描かれるということで、３人の人生にどのように影響を与えていくのか楽しみだ。

○　３人の主人公を描くという構成とのことだが、テンポも速くこれからの展開が楽しみだ。主演俳優の人柄も演技ににじみ出ていて好感がもてた。また、脚本の面白さが決定的に重要だと感じるが、今回は第１週を見ただけでも期待を持つことができた。土曜日に新作が放送されなくなったことについては、非常にもったいないと感じる。視聴者を半年間テレビに釘付けにするコンテンツを作ることは容易ではなく、毎朝視聴するという習慣を大事にした方がよいのではないか。

○　ラジオを中心にその周りに家族がいて、団らんや賑い、そしてお茶の間があり懐かしい気持ちになった。ラジオというテーマを通じて社会の活気やあたたかさ、やすらぎや人間らしい暮らしをよく描けていたと思う。主人公の安子の愛らしさ、明るさ、少女らしい素直さがとてもよく表現されており、特に安子と兄の算太の会話の中でほのぼのとした優しさが感じられ、あたたかい気持ちになった。気になる点としては、セットの街や着ている洋服、畳や障子もきれいで整然としていたが、貧しい暮らしをリアルに表現した方が貧困の中の明るさのようなものが強調されてよいのではと感じた。外国人に道をきかれ答えるシーンがあったが、教科書的な英語で、もう少しリラックスした英語でよいのではないかと思った。

○　英語ということば、家族の血のつながり、ラジオというメディアツールを通してどんなふうに 100 年間を描くのか興味深く、楽しみだ。当時は、ラジオは置いてあるその場所でしか聞けないような時代で、お茶の間にラジオが鎮座している光景や家族の時間の共有の仕方も懐かしく感じた。第５話の最後、駅前まで稔を追いかけ

た主人公の懸命さには涙腺が緩んだ。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの連続テレビ小説の１番大きな存在意義は、毎日の始まりの時間に素敵な物語を届けることで、日本の朝を輝かせていくということだと思う。「カムカムエヴリバディ」１番の特徴は 100 年間を描くことで、他のドラマのように７０年前から始まり４０年前で終わるような時代劇とするのではなく、現代まで続く 100 年間を描くことで、100 年前からの日々の積み重ねが繋がっているということを感じていただくことが狙いだ。ラジオ英会話のテキストついては、当時からテキストは存在しており作中のテキストも実際のものを参考に作成した。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２３日（土）の「関西“愛”認定バラエティー　ちゃうんちゃう？」（総合　後 8：15～8：45／関西地方向け）を見た。1970 年の大阪万博をあまり知らなかったが、迷子対策でテレビ電話が使われていたことには驚いた。出演者のリアクションや、ちゃうちゃうさんにふんする芸人のチョイスが面白かった。琵琶湖大好きのるい君は素晴らしかったが、出題されたクイズと回答とのギャップがありすぎたのは残念だ。全体的にワイプからのツッコミも面白く、早いテンポで進みよかった。

○　大阪万博の映像はテレビで何度か見たことはあるが、迷子が多かったことや終電で帰れないことなど知らなかった事実もあり、よいところや華やかな部分だけではなく、大変だった部分も取り上げられていたのは面白かった。大阪万博を知る世代の人が出演者にいて、当時どうだったかという話があったらなおよかったのではないか。「ロコだけが知っている」も同じように地域の知らなかったことを掘り下げており、クイズ番組かどうかの違いはあるが、「ちゃうんちゃう？」とどう差別化されているのか気になった。

○　この番組は、全体的に関西の若者のノリというか、騒がしい印象を持ち、中高年には受け入れられにくいのではないか。出演者も若い人が多かったが、扱う題

材は 1970 年の大阪万博で、どの年齢層をターゲットにしているかわからなかった。

○　過去の万博の歴史を振り返りながら、2025 年の大阪万博につなげる流れはよかった。現在はドバイ万博が開催されており、日本館の人気があることは報道されているが、海外の万博については必ずしも報道が十分ではないと感じている。招致の仕組みなどにも触れられれば 2025 年の大阪万博の新しい意義を考えることができるのではないかと思う。

○　クイズ形式の番組で、見ているだけで視聴者も参加している気になり興味を持ちやすいと感じた。出演者はもちろんだが、ＶＴＲに出ていた一般人も面白く、大阪らしい愉快な番組だったが、お坊さんに番組で用意した帽子をかぶせるのはよくないのではないかと感じた。

○　関西愛を刺激するバラエティー番組という説明があったが、クイズ部分の必要性が感じられなかった。スタジオでのやり取りも自分にはあまり面白いとは思えなかった。関西のそれぞれの地域の話題を放送すること自体は面白かった。

○　関西の地域に関する豆知識を伝えるような番組だと思った。多くの番組は関東が題材であることが多く、そこで知る地域の情報について誰かに話したくなることはあまりないが、関西にフォーカスした番組はその場所に住んでいる身としてはよかった。滋賀の琵琶湖のるい君については、若い子の活動を周囲が応援している感じがしてよかった。

○　タイトルから想像されるイメージとは異なり、意外と面白かったが、番組の構成や演出に新鮮みがないと感じた。取材した情報をスタジオで見て出演者がコメントしたりクイズに答えたりというフォーマットは他の放送局にもある。逆に「ドキュメント７２時間」のような作り物ではない人々のドラマの方が新鮮みを感じる。情報をどう切り取って、加工し伝えるかということがポイントになると思うが、バラエティーという手法で伝えるにしても、ＮＨＫにしかできないフォーマットを考案して制作したほうがよいと思った。

○　天神崎の夕映えスポットや、明石の天文台の夕焼けパンダなど知らないところ

を紹介していて見応えがあった。スタジオについてはにぎやかすぎて、どの視聴者をターゲットとしているのか、広い層の視聴者獲得にはつながらないのではと疑問に感じた。気になったのは、人の敬称の使い分けだ。るい君は「君」、ちゃうちゃうさんは「さん」、女性タレントは「ちゃん」や「さん」が使われており、ＮＨＫでは敬称の基準が男女なのか年齢なのか、芸能人と一般人の区別によるものなのか伺いたい。

○　1970 年の大阪万博は近畿地方ではいまだに話題にのぼるが、同じ話が多い印象だ。万博自体だけではなく、万博後われわれがどのような国をつくってきたのかを、万博やオリンピックというキーワードで読み解くことが出来ると思うので、そういう別の視点で番組を作ることも期待している。

（ＮＨＫ側）

「ロコだけが知っている」は全国の地域の情報を伝え、「ちゃうんちゃう？」では関西の地域の情報を伝えていき、それぞれ全国の方にも関西の方にも愛される番組を目指したい。

（ＮＨＫ側）

特に大切にしていることは、情報の深さや発見感に加え、情報を教えてくださった方の熱量、地域への愛情がいかに感じられるかという人間的な部分にも注目して掘り下げていくことであり、それが番組のアイデンティティになっていくのではないかと感じている。ターゲットの年齢層については、３０代から４０代の親とその子どもにもみていただけるような番組にできるか試行錯誤している。クイズの質や納得感、出題と解答との落差といったあたりのクオリティを上げていくことが他の番組との差別化につながると考えている。

（ＮＨＫ側）

敬称については、「ＮＨＫことばのハンドブック第２版」に則り、原則として「さん」あるいは「氏」としているが、学生や男性の未成年者には「君」を付けてもよく、学齢前の幼児や、場合によっては小学生にも「ちゃん」をつけてよいとしている。また、出演者同士の距離感や親近感を演出する上で番組や場面によっても使い分けている。

＜放送番組一般について＞

○　１１月５日(金)の「にっぽんの芸能」を見た。中村壱太郎さんが上方歌舞伎の魅力を紹介しており、上方歌舞伎と江戸歌舞伎の違いがわかって有意義だった。歌舞伎の中では徐々に江戸歌舞伎が中心になっていき、上方歌舞伎も継承者が減ってきているので、関西の歌舞伎の魅力を今後も発信してほしい。

　１１月１２日（金）の「2021　ＮＨＫ杯フィギュア」を見た。放送時間も長く、種目もシングルだけではなくアイスダンスやペアも丁寧に放送しておりとてもよかった。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２１年１０月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ・対面開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、「ロコだけが知っている」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　篠　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　員　安達　えみ（合同会社　樋　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜「ロコだけが知っている」（１０月６日（水）放送)」について＞

○　大阪と和歌山、どちらの話題もおもしろく見た。ナレーションの女性アーティストが柔らかい話し方で聞きやすく、好感を持った。番組のタイトルどおり、地元に住んでいないとわからないようなとっておきの情報を紹介する番組だと思うが、和歌山のパンダ好きの夫婦が見つけたパンダの魅力については、まさに地元の人ならではの視点で素敵だと感じた。

○　司会進行のテンポやスタジオの雰囲気もよく、楽しく見た。大阪の立体看板は目立つので、街の風景として馴染みがあったが、製作者までは意識したことがなかったので新鮮だった。和歌山の話題で、白浜にあるテーマパークでゲスト出演者がアルバイトをしていたことは、それこそ和歌山県民も知らなかった情報なの

ではないかと思う。パンダ好きの夫婦が発見したパンダの楽しみ方も地元の人でも知らないような情報で、この番組を見てパンダの楽しみ方が増えた。女性アーティストがナレーションを担当していることについては、もう少し番組内で触れてもよかったと思う。

○　タイトルにあるロコということばが何を意味するのか気になった。４０分で２つの地域に絞って取り上げており、とてもわかりやすかった。取り上げられている話題が面白く、そこに行ってみたいと思える内容だった。司会の芸人も、コメントが大げさすぎず好感が持てた。

○　立体看板が多い背景に、いかにも大阪らしい経営者が活躍しているという目のつけどころが素晴らしかった。立体看板の製作者は、趣味と仕事を両立させており、ワークライフバランスを考えるうえで大変よかった。道頓堀の歴史館については、いつ頃から、どのあたりにあるのかがわかれば訪れる人も増えると思う。細かい点だが、道頓堀という地名のイントネーションが番組内に２つ混在していたので、どちらが正しいのか気になった。和歌山の話題では地元ならではのパンダの情報が紹介されており、楽しく見た。

○　司会に安定感がありよかった。お腹が空いて転がる白浜のパンダが可愛らしかったし、からくり人形にルーツを持つ道頓堀の立体看板も面白かった。立体看板の７割を手がけるという看板製作者のキャラクターがよく、全体を作らずに見えない部分を想像させる斬新な発想力の素晴らしさや、なるべく楽をしたいと本音を話す愛嬌など大阪の人の魅力が伝わった。京都の一部地域では看板に対する景観規制が厳しいが、道頓堀の規制がどうなっているのかについても知りたかった。

○　立体看板とパンダの２つの話題だったが、情報の量や話題を増やすなどしてもよかったのではないか。バラエティー番組を制作するＮＨＫの努力はうかがえたが、どうしても民放と比較してしまう。ＮＨＫらしい演出でバラエティー番組を新しく定義してもよいのではないかと思う。

○　タイトル以上に内容にインパクトがあり、とても楽しめた。道頓堀の立体看板の製作者の話では、こういう仕事があることに驚き、教育番組を見ているような気持

ちになった。この製作者にさらに密着すれば別の番組が作れるのではないかと思った。白浜のパンダはローカルの象徴と言える話題であり、立体看板と内容のバランスがとれていた。どちらの話題についても丁寧に取材をしている印象を受けた。

○　番組を見ている途中に抱いた疑問はすぐに解消できるように構成されていると感じられ、スムーズに見ることができた。また、司会のコメントの緩さがちょうどよいと感じた。大阪の立体看板について、製作コストが店側としてペイできているのか気になった。看板製作者の働き方が興味深く、ワークライフバランスの取れた働き方の参考になるかもしれない。和歌山のパンダについては、生態の解説をロコ自身がされていたことがよかったし感心した。このような興味深い生態の知識を得ることで、観察がより楽しくなり、さらにのめり込んでいくと思う。日々の細かな観察は近くに住んでいる人しかできないので、これこそがまさにロコならではの楽しみ方であると感じた。

○　楽しく見た。脇役とも言える立体看板について、今度訪れた際は看板に注目したいと思わせる興味深い内容だった。出演していた看板製作者のような存在が街の風景を変えていっている事実が興味深かった。一方で、まわりの人が繰り返し「仕事をしない」と言っていたのはしつこいと感じた。大阪局が制作するバラエティー番組で、司会が関西出身以外の人なのは新鮮で、スタジオのセットも番組内容に合っていた。今後も引き続き、まさにロコだけが知っているという観点でより希少性が高い情報を発掘してほしい。

○　立体看板から見る大阪人のＤＮＡという紹介で、人を喜ばせたい、楽しませたいというキャラクターの引き出し方がされていたのがよかった。大阪人の自己肯定感を高められたのではないか。和歌山の、寝起きのパンダのかわいさは地元しか知らないよい情報だった。全体を通じて、出演したロコたちの人物像がうまく描かれておりよかった。ただ、タイトルのロコという名前がどこから来ているのか知りたい。この番組は地元のとっておきの情報を発信するという新しい形の視聴者参加型番組だと理解しており、次回も楽しみにしている。

○　ロコということばの説明が少なく意味がわからなかった。本当に地元がよいかどうかは地元以外との比較で知るものであり、違う価値観や広い世界を知らなければ故郷のすばらしさはわからないと思う。最近では地元を離れなくてもいいという考

えが広まり、郷土愛や地元の特徴的な事柄に興味を示す人が増えたように思う。こうした日本人のメンタリティーが背景にあるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

この番組は、大阪局がハブとなり、全国の地域放送局と連携して制作をしている。大阪局の制作担当者が、地域放送局が発見した地元愛にあふれた人たちを、どういった形で紹介できるか考えて制作している。よりＮＨＫならではの情報をバラエティー番組という演出の中でうまく融合させて、大阪局制作という色合いを織り込みながら、東京とはまた違う価値観を地域と共に発信していきたい。

（ＮＨＫ側）

ロコと言うことばは、ローカルを愛する人という意味で使用している。元々ハワイのことばで地元っ子という意味であり、地元のとっておきの情報を教えてもらうというコンセプトで制作をしている。地域のよさは地元の人が一番知っていると考え、それを教えてもらおうという狙いだ。そして、登場するロコから単に情報を聞くだけではなく、地元を愛する人たちの人柄、地元に対する熱量を伝えたいと思い制作した。日本にはまだまだよいところがたくさんあると感じてもらえるよう、今後もＮＨＫの多くの地域放送局と一緒に魅力ある人を紹介していきたい。

（ＮＨＫ側）

道頓堀のアクセントについては、「ＮＨＫ日本語発音アクセント新辞典」に準拠しており、平坦なイントネーションが一般的だが、地元では真ん中が上がるイントネーションも使用されている。ＮＨＫでは視聴者により伝わりやすいように無理に統一せず、地元の人が使っているアクセントを使用することもある。

＜放送番組一般について＞

○　９月２４日(金)のかんさい熱視線「コロナ禍で広がる“婚活アプリ”世代を超えいま何が？」を見た。カップルとして成立した方はまだしも、まだ婚活中の方が顔を出して自身の状況を口に出すのははばかられるだろうし、よく取材ができたなと驚いた。婚活をしているという男性への、友人夫婦の電話でのアドバイス

が印象的で「就活の面接で本命の企業しか受けない人はいない」という発言が的を射ていると思ったが、結婚や就職を数値や文章だけを見て決めてよいものかと複雑な思いになった。

○　婚活アプリは周囲の人たちも使っており、実際に結婚に繋がった人もいる。今回番組として取り上げられたことで、人々の認知度がさらに高まったのではないか。驚いたのは中高年も利用していることで、あくまでコミュニケーションの相手を探すツールとしてとらえていることも新鮮だった。自分のことを事前に伝えることでミスマッチも防げるので、よい出会いの手段としてとらえることができると思う。番組ではよい面だけでなく、相手を肩書だけで判断してしまうといった課題についても触れていてよかった。婚活アプリは数年前よりポジティブなイメージを持つ人が増えており、これから先も増えていくと思う。

○　婚活アプリは若い世代を中心に広まっていると考えていたが、中高年もかなりの割合で利用していることを知り驚いた。結婚相談所だと、名前の通り結婚を前提としており入会金や成婚料が必要だと思うが、婚活アプリだと複数の人と軽い出会いが可能で、結婚までいかずとも友達程度の関係になることができる。それが無料でできることが利用者の増加につながっていると感じた。一方で、婚活アプリでは相手が書き込んだプロフィールを信じるしかなく、マルチ商法による被害など危険性もあると感じた。コロナ禍で新たな出会いも少なくなり、より一層人とつながっていたいという欲求が増えているので、今後ますます利用者が増えていくのではないか。

○　結婚を目的にするのではなく、コロナ禍でのコミュニケーションツールとして利用している人も多く、婚活アプリが社会的な機能をもっているということが勉強になった。昔は皆婚社会であり、その常識が前提にあったが、最近は結婚自体が疑問視されている意見も多く、純粋にそうまでして結婚したいのかと思ってしまった。人間の幸福観が相対化されていくなかで、大げさに言うと人間にとって結婚とはなんだろうということも考えさせられる番組だった。

○　この番組は光と影の両面を丁寧に取材している硬派で質が高い番組だといつも思っている。今回は同じ趣味を持つ相手を見つけられる便利で効率的な婚活アプリをテーマとしていたが、中高年にとっての他者とのつながりが得られる光の部

分と、出会いを消費行動のように捉えてしまい虚無感につながるという影の両面が丁寧に取り上げられていた。スタジオに出演していたのが文筆家の方であり冷静で適切なコメントをしていたが、専門性を生かしたもう少し踏み込んだ解説があればなお深い番組になったのではないかと思う。

○　婚活アプリの普及は、そもそもコミュニティーの作られ方の変化が最大の要因だと思う。個人で仕事をしている人は、組織に属している人と違い、ほかの人とのつながりが薄いことや、女性の就労者も増え交際や結婚のタイミングが難しくなっていることもあり、ＳＮＳでの出会いが増えてきた。こうした日本の現状を番組のテーマとしたのはよかったと思う。一方、新型コロナウイルス感染拡大に絡めてしまうことには疑問に感じた。

○　婚活アプリをニュートラルな視点でよい面も悪い面も取り上げており、この番組をみて利用する人もいるのではないかと思った。婚活アプリに限らず、オンライン上のグループを作れるサービスは小学生でも普通に利用している時代なので、ＳＮＳで知り合った人と直接会うことに抵抗がなくなってきたと感じている。利用するアプリやサービスも個人の好みに合ったものを選択する時代になってきており、ＬＧＢＴＱの人たちや周囲の人と違うものが好きな子にとっての居場所にもなるし、人を救う部分があると思う。危険性や課題を伝えることも大事だができるだけ前向きな発信をしてほしい。

○　コロナ禍で婚活事情がどうなっているのか気になっていた。珍しい趣味を持つ人同士をマッチングできるという例が紹介されていた。アプリならではの利点を非常にうまく伝えており、その利便性に納得する一方で、人間がプロフィールだけで簡単に選別されてしまうという問題提起もされており、バランスの取れた内容だと思った。また、婚活アプリが高齢者の孤独の問題の解決の糸口の一つになるかもしれないと感じられ、非常に興味深かった。想像していた婚活アプリの利用方法とは全く異なっていたので驚いた。

○　番組を見てなるほどと思った。あらゆるものやサービスは作り手の意図を超えて、利用者が新たな使い方をしていくという面があるが、中高年が婚活アプリを結婚ではない新たな出会いやつながりのために利用しているのは面白いと思った。古くは仲人や自治体のイベント、合コンと言った仕組みがマッチングアプリに飲

み込まれている。スマートフォンをめぐる社会の進化や変化はまだ序の口だと感じた。

○　婚活アプリでなくとも、これまでも人と人との出会いを紹介するサービスはあったが、その役割がアプリに代わっていくことに今の時代を感じた。危険性はあるにしてもコロナ禍で人と集いたい、出会いたいという欲求は自然の欲求であり大切なことだ。そうした場を提供するこのようなアプリはますます進化していくと感じた。

○　かつては直接会うことによって相手の人柄などを確かめていき、より近づきたいという思いがあったように思う。婚活アプリでは身長・学歴・年収・趣味・嗜好など相手を定量的な評価で選択するという点に疑問を感じた。かつての出会いを提供する場が少なくなり、それでも他者とのコミュニケーションを求めるため、婚活アプリがそれを代行していることは興味深かった。しかし、相手が正しい情報を伝えているかどうかは信じるしかなく、その選択は自己責任だが犯罪にもつながってしまう可能性をはらんでいると感じた。

（ＮＨＫ側）

今回のような婚活アプリや関連した出会い系のサイトについてはこれまでもさまざまな角度で取り上げてきた。これからも引き続き取材を進めたい。

（ＮＨＫ側）

婚活アプリに光と影があるとご意見をいただいたが、制作チーム内でも性別、年代を超えた議論をして制作をした。影の部分である犯罪性については、１８歳未満は基本的には使用できないことを伝えるなど、スタジオでも個別の事例を含めて特に注意した。新しいコミュニケーションツールは婚活アプリに限らずさまざまなものがあるが、今後このような番組を作っていく上で、家族のあり方やコミュニティーの変化などの視点も含めて制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１１日（月）の「ニュース　シブ５時」内で中継していたプロ野球のドラフト会議で、画面の下部に商品のロゴが大きく映っていた。ロゴを隠す方が不自然だとは思うがかなり目立っていたので気になった。

（ＮＨＫ側）

商品名やロゴが映ってしまうような場合は、ＮＨＫが特定企業の広告・宣伝をしていると受け取られないよう、アップにしないなど常に撮影方法を検討している。今回はドラフト会議のロゴのすぐ下に商品名が入っており、無理に映さないようにするとかえって不自然になってしまうため、全体として自然にご覧いただけるように放送した。

○　「テレビ体操」に１０月から男性が出演しており、とてもよいことだと思った。今後ＬＧＢＴＱなど多様性に富んだ出演者を期待している。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２１年９月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「２０２１年度後半期の国内放送番組の編成」および「２０２１年度後半期の近畿地方向け番組編成」についてそれぞれ説明があり、「２０２２年度の番組改定」とあわせて意見交換を行った。続いて、事前に視聴してもらった、終戦ドラマ「しかたなかったと言うてはいかんのです」、「こどものど自慢」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　樋　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り
代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜「２０２１年度後半期の国内放送番組の編成」および
「２０２２年度の番組改定」について＞

○　Ｅテレで女性の視聴者を意識した番組を放送するとのことだが、イメージしている女性の層はどのようなものなのか。

（ＮＨＫ側）

「ソーイング・ビー４」は、女性はもちろんだが、女性・男性を問わずナチュラルライフに興味がある方たちを意識しており、その新シリー

ズだ。また、１１月にはＳＤＧｓ、特に環境・ジェンダー・若者をテーマとしたキャンペーンを行い、様々な特集番組でお届けする。

＜終戦ドラマ「しかたなかったと言うてはいかんのです」
（８月１３日（金）放送)」について＞

○　戦争をテーマにしていることもあり重い雰囲気で、考えさせられるドラマだった。番組タイトルが印象的だが、登場する陸軍中将が主人公に言った「何もしなかったという罪」ということばも心に残った。このことばが主人公にとっても生涯かけて悩み続けるきっかけになったと思う。何が正解だったのかを考えさせられ、見終わった後もよい意味でもやもやする内容だった。主人公の世代と、戦争を知らない世代とでは、この番組を見たときの感じ方が違うのではないか。

○　戦争における非常に厳しい現実を映像で伝える意義深いドラマだった。ドキュメンタリー映像とドラマを組み合わせることで、リアリティを感じさせられたし、戦争経験がない視聴者にも訴えるものがあったのではないか。しかたなかったと言ってはいけない、という教訓は非常に心に響くもので、ドラマでは命に関わる過酷な状況だったが、現代社会でも会社の上司や多数派に押され、やむを得ず何かをしてしまうことが場合によっては起こりえる。そういう人がドラマを見たときに、やはりしかたなかったと言ってはいけないと感じる教訓になったのではないか。じくじたる思いを抱えながら、組織に属して生きる現代人に勇気を与えるメッセージがあった。

○　視聴者に考える機会を提供する教育的によい番組であり、出演しているキャストもよかった。「何もしなかった罪もあるのではないか」、「戦争だからしかたなかった」という台詞をはじめ、簡単に結論の出ない難しい問いかけがあった。「きなさんなや」という陸軍中将のことばや、我が子の「お父さん」との叫び声は有事にあっても変わらない人間や家族のぬくもりを感じた。有事において冷静な判断が極めて困難であるという命題はもっともだと思うが、現代の状況にも通じることだ。先の見えない新型コロナウイルス流行下で、冷静な判断ができているか不安にも感じ、また冷静にものごとを見なさいと諭されているようにも感じた。タイトルがドラマのクライマックスをそのまま表現しており、物語の結末を先に知ってしまうようで少し残念に思った。

○　戦争を経験した世代が少なくなり、戦争について考える機会が減るなかで、戦争とはどのようなものなのかについて伝えるよい番組だった。ドラマというより映画のように引き込まれ息をするのも忘れたほどだった。同時に、戦争が人間をおかしくしてしまうということから、新型コロナウイルスに振り回される現代を連想させられた。題名は、まさに子どもたちや現代人に向けて発しているようなことばであり、周囲の空気に流されない信念が大事だと感じた。描かれたことを肝に銘じて、間違った判断をしないようにと自分のこととして感じられる番組だった。

○　当初は重すぎる感じがして全く見る気がしなかったが、見始めるとぐいぐいと引き込まれ見ごたえがあった。戦時下という特殊な状況において、命を軽んじることが正当化されることの恐ろしさを痛感した。人や社会を狂気に導いてしまう戦争を二度と起こしていけないと考えさせられる意義ある番組だった。まるで映画を見ているようで、映像も出演者もよかった。主人公が釈放され、夫婦二人で赤い傘をさして歩いていた終盤のシーンは印象的な映像だったが、途中気象警報の速報スーパーが入った。美しい映像やストーリー展開を考えると残念で、地域やタイミングを配慮してほしかった。ＮＨＫは良質な番組が多く、このドラマも次世代を担う若者に見て欲しいが、本当に伝えたい世代に伝わっているかは疑問に感じた。

○　冒頭の手術シーンで一気に引き込まれた。出演者は若い世代からも人気の俳優で、チャンネルを切り替えているときに出くわすと、ついつい見てしまうのではないか。また、随所に使われた記録映像が、当時を知らない人には印象に残ったと思う。タイトルにもある、しかたなかったと言ってはいけないということばからは、どうすればよかったのかという正解はなく、ずっと考え続けなければならないと感じさせられた。最後のシーンで、釈放され年を重ねた主人公に若い記者が話を聞くという構図を見たとき、戦争については若い世代にもっと語り継がなければならないと思った。こういう戦争に関連した番組が、若い世代に必然的に見てもらえるような形があればよいのではないか。

○　冒頭の実験手術のシーンは見るに堪えがたく感じていたが、番組を見ていくにつれ引き込まれ、感動するドラマだった。主人公はもちろん、妻の献身やアメリカ兵の

人としての優しさなど、どのシーンを見ても人間模様が素晴らしく描かれていた。実際の裁判の記録や多くの証拠もあり、それらを検証して制作した番組だと思うが、どこまでが史実でどこまでがフィクションなのか気になった。戦時中という異常な状況下に限らず、正しいことを正しいということは難しい。また、時代とともに人の価値観は変わっていくので、その時のベストな判断に基づいて発言、行動をしたと言い切れる信念が大切だと感じた。ＮＨＫとして、何を伝えようとしてこの番組を制作したのか、なぜこのタイミングなのか、制作・放送に至るまでに局内でどのような意見があったのか知りたい。

○　陸軍中将が主人公に言った「きなさんなよ」ということばによって、主人公が個人で責任を負うことの葛藤がうまく表現されていた。拘置所に家族が来て面会し、帰るときに長女が「お父さん」と呼ぶシーンなどは、主人公の心の揺れを繊細に表現していると思った。このドラマのもととなった事件については知っていたが、こういった問題の責任を個人に負わせることは辛いと感じる。科学が戦争に利用されることの危険性は、以前から警鐘を鳴らされていたが、考えさせられる問題だ。戦争の記憶を伝えていく難しさに加え、記憶を伝えていく態度がどのように引き継がれていくかということの難しさも実感した。タイトルにもあるように、正しい意見が言いにくいということはよく起こりえることで、身につまされるようなドラマだった。演出で気になったことは、独房の中で、夕方にカラスが鳴くシーンがあったが、急に現実に引き戻された気がして少し興ざめした。

（ＮＨＫ側）

一番伝えたいことをそのままタイトルにした。個人に責任を負わせることについてのご意見もあったが、だからといってしかたないと言ってはいけないということをテーマとした。現代にも繋がることだというご意見をいただいたが、今だったらどうするか、あなただったらどうするかといった問いかけをしたいと考えた。もととなった事件があり、主人公のモデルになった人物が晩年に至るまで「しかたなかったと言うてはいけない」と語っていたという事実をもとに、ドラマとして制作した。若い視聴者層にどう届けるかについては、大きな課題だと認識しており、今後も番組制作や広報で工夫をしていきたい。

＜「こどものど自慢」
（８月１５日（日）総合　後１２：５０～１３：３０）について＞

○　純粋に楽しく見ることができた。祖父母への思いを込めて歌っている子どもたちの姿は胸に迫るものがあった。

○　新型コロナウイルスの流行下での全国の子どもたちの生活や、それぞれの地域のことばにも触れながら、歌を通して地域や家族をつなぐ意義深い番組だった。出演していたタレントもほのぼのとコメントしておりよかったが、このタレントの人選の理由が知りたい。

○　こうした視聴者からの投稿を使った視聴者参加型の番組は、もっと作られてもよいと感じた。出演していた子どもが、将来の夢は歌手になって動画投稿サイトに出ることだと言っていたが、子どもたちにとって、テレビに出演することよりも、動画投稿サイトで有名になることの方が価値があるということに驚き、子どもたちのテレビに対する価値観が表れているコメントだと思った。また、コンテンツに対する世代間のギャップがなくなっていることも感じた。動画投稿サイトやビデオオンデマンドが広まり、老若男女問わず同じコンテンツを視聴することができるため、番組の作り方もそういう視点をもっと持ってもよいと感じた。

○　スタジオのセットがキャンプをイメージしており楽しい雰囲気が伝わってきた。出場していない子どもたちの動画もあり、受験やスポーツ、学校のことなどそれぞれが置かれている生活環境もさまざまで、多様性がわかりやすく表現されていた。通常の「のど自慢」と違い、鐘を鳴らす判定がなかったので歌のうまさではなく、歌が人と人とのコミュニケーションの手段だということや、誰かを思う気持ちや感動で人は元気になるということが伝わってきた。タレントも老若男女がそろっておりよかったし、出場者も性別や年齢を考慮して人選していると思うが、ＬＧＢＴの方もいれば、番組を見ている子どもたちも自然に多様性について学ぶことができるのではと思う。

○　コメントしにくい番組だった。出演している本人や親族にとってはよい番組だと思う。生放送だったが、事前に投稿や収録された映像が多く、この番組を続けるのであれば演出についてもう少し工夫した方がよいと感じた。

○　いろいろな環境の子どもたちや家族が出演していてよかったが、生放送なのか収録なのかわかりづらかった。最後のスタジオでの出演者の掛け合いは慌ただしかったが生放送らしさを感じた。

（ＮＨＫ側）

コロナ禍で、子どもたちが今何を思っているのかを届けるために、「こどものど自慢」を制作した。出演タレントは、自身の子どもや孫を見る目で感想を語って欲しいということで起用した。出演者や視聴者を一人でも多く笑顔にできる番組をこれからも多く制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　東京２０２０オリンピック・パラリンピックの放送に関して、開催自体には賛否両論あったかと思うが、特にパラリンピックについては、障がいのある方たちの頑張りや、普段あまり目にしないスポーツを、丁寧な解説とともに届けることで、障がい者と健常者とのコミュニケーションを活性化することに貢献したと思う。サブチャンネルを使って、できるだけ多くの競技を放送したこともよかった。一方、同じ時期に放送していた全国高等学校野球選手権大会について、全国の関心が高く関西地方から発信するスポーツイベントとして大変重要だとは思うが、最近はスポーツも多様化しており、サッカーの女子リーグも始まった。女子スポーツやマイナースポーツもきめ細かく発信して欲しい。

新型コロナウイルスと大会開催との関係については、多くの人が関心を持っており、感染者数の増加には大会が影響しているのではないかと考える視聴者も多いと思うが、そのことに言及する専門家が少ないと感じる。大会を開催した東京の感染者数と大阪の感染者数の変化がどのように違うのかを知りたい視聴者はたくさんいる。こうした視点で放送できることがあれば、是非取り組んでいただきたい。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２１年７月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、「歴史探偵『謎の将軍　徳川慶喜』」」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　　篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　　安達　えみ（合同会社　椹　代表）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り
代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）
安井　良則（大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長
兼 感染管理室室長）

（主な発言）

＜「歴史探偵『謎の将軍　徳川慶喜』（６月１６日（水）放送)」について＞

○　放送中の大河ドラマのキーパーソンでもある徳川慶喜の知られざる一面を見ることができて面白かった。大政奉還と鳥羽伏見の戦いの２つの話題を４５分に入れるのは構成上苦労されたと思うが、歴史上の人物の人物像そのものに迫るというのは他の歴史番組とは違う奥深さを感じた。徳川慶喜が将軍を退いたあとの絵画や書物が登場したのも面白かった。ＡＩを使って「昔夢会筆記」を解析したことは興味深かったが、徳川慶喜が描いたこの絵画や書物から読み取れる人物像も知ることができたらより面白かったと思う。探偵役を務めるアナウンサーは、聞き

とりやすい語り口で、歴史の舞台となった現地で取材やリポートをしており、しっかり伝えようとする姿勢に好感が持てた

○　「歴史探偵」は歴史の一部分を切り取り、掘り下げて謎を解明していくという手法で作られており、歴史に興味がなくても面白く見ることができる番組だと感じた。２０２０年３月２５日に放送した「黒船来航」の回でもＡＩを用いて、本当に外国船が襲来したらどうなるのかというシミュレーションをしていたが、今回は徳川慶喜の言葉から心の内を探るという試みをしており、現代の技術を使ったＮＨＫならではの番組だなと感じた。ただ、ＡＩで検証したときに、徳川慶喜がはっきりものを言っていないという結果になったが、それはなぜか、背景をもっと知りたかった。アナウンサーが務める探偵役は、言葉がとても聞き取りやすくてよかった。

○　大政奉還という歴史の大きな節目にあたって、当事者の徳川慶喜の思いを、最新の資料分析の技術と、徳川慶喜の回想を残すことに貢献した渋沢栄一と関連づけて明らかにした意義深い番組だった。組織の大きな意思決定においては、トラブルのない迅速な意思決定のため、また、議論を混乱させないために、場合によって事前の根回しが必要であることは現代の組織にも通じる面があると思ったが、「内通者」という表現がネガティブに聞こえかねない点が少し気になった。また、大政奉還の際に、最初に集まった諸藩や、その場に残ったメンバーはどこの藩の人たちであったのか説明があれば、さらに歴史についての理解が深まったのではないかと思う。

○　大河ドラマにちなんだ大政奉還や鳥羽伏見の戦いの背景に迫る歴史ものとして、奥行きのあるよい番組だと感じた。一同承知を取り付けるための家臣への根回し、勝てるはずだった薩摩藩との戦いでの誤算、渋沢栄一による名誉回復などが丁寧にわかりやすく描かれており大変興味深い内容だった。わかりやすさの理由としてはアナウンサーを探偵役として起用していることもあるのではないか。一方、ＡＩやデジタル技術を駆使して謎を解き明かすとうたっていたが、大政奉還に関する記述があいまいだったことはＡＩによってわかったが、それ以上の踏み込んだ解析がなかったことに物足りなさを感じた。また、最新のデジタル技術を駆使した「戊辰戦記絵巻物」だが、採色して見やすくはなったが徳川軍の戦況は彩色しなくてもわかるのではないかと思う。最新技術を用いるのはよいが、謎を解き明

かしたというほどではないと感じたので、あえてＡＩやデジタル技術を前面に出さなくてもよいのではないか。

○　さまざまな映像の素材を持っており時間をかけて取材ができるＮＨＫだからこその番組だと感じたが、ＡＩについては、想像していたより斬新な解析結果にはつながっていないと感じた。また、歴史番組ではあるが、音楽や雰囲気、番組の構成が全体的にポップな、バラエティー番組に近い表現になっていた。馴染みやすいテイストで歴史に興味のない人にも楽しんでもらえるようにするのか、歴史に興味がある人たちに向けてより内容を深めていくのか、対象とする視聴者をどのように考えているかわからなかった。

○　ＡＩを用いた絵巻物の解析については、笑顔や油断している顔などの細かい表情までわかって興味深く見た。２大事件の謎ということで、大政奉還がどのように成し遂げられたか、徳川慶喜が鳥羽伏見の戦いからどういう風に姿を消したかということが、歴史に詳しくない人でもわかりやすいように番組が出来ていたので、とてもよかった。また、徳川慶喜が油絵や手裏剣、自転車や弓道を行っている姿など現在と変わらないようなところもある写真に驚き、晩年の徳川慶喜の暮らしぶりをもっと見てみたいと興味がわいた。

○　歴史についてあまり関心がなかったが、番組を見て徳川慶喜に興味がわいた。若くして将軍に上りつめた徳川慶喜が、大政奉還によって討幕派を封じ込めようとしたが、結果的に自分の思いとは違う方向に転がり、幕府が敗北してしまったことに対する自身の判断と行為に、生涯じくじたる思いを持ち続けたのかなと思う。そうした徳川慶喜の晩年の生き方について関心をもった。だからこそ渋沢栄一の再三の要請に対して、自分の思いをさらけ出さずにあいまいな表現にしたのではないか。ＡＩを用いた解析については、ＡＩを使わずとも文章を読めばわかるものであり、テレビ番組として見ている人たちにわかりやすく面白く標ぼうする手法として使われたのかなと感じている。所長役の俳優とアナウンサーの二人もよい味をだしていて見やすかった。この番組を見て、時代や場所が変わっても、人間は自分自身や組織のために戦う生き物だと感じ寂しくなった。

○　「歴史秘話ヒストリア」の後継番組として、興味があるテーマの回は見ており、今回も興味深く見ることが出来た。大政奉還については、元家臣である渋沢栄一に語っ

た「昔夢会筆記」に記されている言葉の大半が、ＡＩを使った研究によると、信頼性が低いということに驚いた。諸大名に対する大政奉還の発表がまるで反対意見を徳川慶喜に聞かせたくないと言わんばかりのやり方で行われているのは、一同承知にこだわった徳川慶喜の発案なのか、家臣がそうなるように仕向けたのかなども知ることができればなおよいと思った。

○　所長のキャラクターが番組の雰囲気と合っていてよいが、第三者的な発言が多く、事務所の中の主人公にはなりきれていないと感じた。女性副所長役のアナウンサーが所長になり、所長役の俳優が副所長か所員になれば個性も生かせるのではないか。大政奉還から戊辰戦争に至るまでは教科書でも少ししか記述がなく、徳川慶喜についても細かな人物像はあまり描かれていない。今回はＡＩや最新技術を駆使して徳川慶喜の心理を分析していたが、「いかようにとも、勝手にせよ」と言ってしまったことは将軍として後悔が残るところで、生涯に渡り引きずっているのではと感じた。番組全体については、前番組である「歴史秘話ヒストリア」が大好きで見ており、その後継番組になじむのに時間はかかった。今回の歴史探偵はポップな番組として描こうとしているようだが、科学技術やＡＩはかなり身近なものになってきたのでそこまで強調しなくてもよいと思う。

○　徳川慶喜の「昔夢会筆記」を分析していたが、渋沢栄一のように当時その場にいたわけではないものによる記録では、現代の私たちが活字だけを見て、これこそが歴史の裏側であると考えてしまうかもしれないところに注意が必要だと感じた。やはり記憶にないとか覚えていないとか忘れたということが、ＡＩを駆使して解析したキーポイントなのだろうが、その後の明治政府の中である一定の経済的・社会的地位を徳川家が維持し続けていくためには、発言がはばかられるような言葉もあったのではないか。大政奉還での、事前に反対意見が出ないようにするためのネゴシエーションは現代に生きる人も行う場合があるので、組織を維持して一定の方向性を示すためには時代が変わってもやることは一緒だと思った。

○　徳川慶喜について初めて知ることがとても多かった。京都で大政奉還が発表されたことは知っていたが、そこに大名がほとんど居なかったこと、すでに幕府が近代的な軍備を持ち、兵力において薩摩軍を上回っていたことは初めて知った。しかし、徳川慶喜の心理についてはＡＩを用いなくても推測できるのではとも思った。

（ＮＨＫ側）

「歴史探偵」は、新年度の大阪局制作の番組として、これまで培ってきた歴史番組のノウハウに加えて、今の新しい科学技術や分析手法を新たに用いて歴史の謎に挑む、新感覚の番組というスタンスでスタートした。今回はＡＩによる分析で、文章を読み取ることで、徳川慶喜の心情に迫れるかどうか挑戦した。

（ＮＨＫ側）

「歴史秘話ヒストリア」以前の歴史番組では、アナウンサーが進行を務めて展開していくという形式を取っていたが、「歴史探偵」ではそこに俳優を交え、大胆に変えてみようと挑戦をしている。歴史ファン以外の視聴者にも興味を持ってもらうことがねらいの一つだ。今回の番組で取り組んだのは、徳川慶喜が晩年に渋沢栄一に語った「昔夢会筆記」をＡＩで分析し、あいまいなことばがいったいどこに含まれているのかを読み解いていくという形を取った。大政奉還の部分は、ほかの箇所と比較してもあいまいなことばが多く、意図的に隠そうとした部分があるのではないかという点を描いた。徳川慶喜の晩年は、過去のことをどれくらい明かすべきか、という葛藤があったのではないか。今回１つの手法としてＡＩを取り上げているが、ほかの可能性も探りながら、新しい番組を制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月１３日(日)の「目撃！にっぽん『“最後の電話”から生きなおす』」を見た。これは簡単には感想を語れない番組であるとの印象を受けた。「自殺の名所」とされている場所にＮＰＯ法人があって、教会の牧師でもある理事長を中心に、いのちの電話を始めとする自殺志願者に寄り添う活動をずっとされているということも初めて知ることができた。ここではさまざまな問題を抱えながら頼れるところもなく、自殺を考えた人たちが共同生活を通して新しい人間関係を構築し、人生を新たにスタートさせていくための場を提供されていると思った。一度は生きる気力をなくした方々の人生と向き合って、寄り添って、見守り続けるということは、自分の人生をその方々に捧げる覚悟でなければ、とてもできるものではないと思う。この理事長が、現在、自身のがんの治療を受けながらも活動を続けよう

とするのは、その覚悟を持ち続けて活動してこられたのだなと思った。

○　見ている最中も、見終わっても、心が何か洗われたような気分になる番組であり、非常に興味深く見ることが出来た。人の命のためにこんなに真剣に取り組んでいることを知って、胸が熱くなる思いだった。自身が病に侵されておられるにもかかわらず、1,000 人を超える人々を助けてきた理事長はすごい方だと思う。命を絶つ寸前までいった人たちが、理事長の思いや、共同生活を通じて、生きることの意義を見いだし、再び社会生活に戻っていく姿が描かれていたが、その点もとてもよかった。新型コロナウイルス感染拡大下の中で救いを求める人が増え続けてパンク寸前だという話があったが、ひとつのＮＰＯ法人で対応できる限界を超えていると思う。こういった事実を広く伝えるという意味では番組が大きな役割を果たしていると思う一方で、こういった事実が一般の視聴者に伝わっていくだけでなく、番組が指摘している課題を解決していけるような仕組みを考えていかないと、世の中は変わっていかないと思う。

○　こういうテーマにじっくりていねいに寄り添って作ってもらえて、ありがたい。理事長の、人を救うことは自分の役割だと話す迷いのない姿勢や、自殺が遠い世界の出来事ではなく日常にあることが伝わってくる番組の作り方で、とにかくその人に寄り添うということが凝縮されていて、すごい番組だと思った。１人の人間をリスタートまで持っていくのに７～８年かかるというのは、ＮＰＯ法人の範ちゅうを超えているとも思うが、病に侵されながらも走り回っている理事長の姿を見て、自分にできることは何だろうと考えさせられた。

○　このような活動が番組として取り上げられることはよいことだが、では何ができるのかということが難しい。募金や手伝いをすることはできるかもしれないが、根本的には行政の対応の問題だ。本来であれば行政や然るべき組織が動いて体系的に解決しなければならない。知らないよりは知ってもらったほうがよいが、大体は番組を見て「大変だな」、で終わってしまう。いのちの電話はこれからどんどん増えていくと思うし、それを番組として追いかけて発信することはよいことである反面、このＮＰＯ法人に人が殺到する可能性もある。報道をする側として、そのような問題もあることは知っておいた方がよいと思った。

○　いのちの電話という言葉は知っていたが、改めて関係者のご尽力に心を打たれ

た。自身も闘病をしながら気負わずに支援を続けるＮＰＯ法人の理事長の生き様には、ただただ頭が下がる思いだった。社会の縮図である共同生活で、人との繋がりを取り戻し、数年で社会復帰を目指す仕組みというのも、すばらしいと感じた。仕事や家族、家を失くしても支えてくれる場があるというのは、その本人にとって安心させられるよい番組だった。入所している人の就職が決まったのに１か月後に解雇されるというのは衝撃だったが、それでも声を掛けてくれたのはありがたいと、前向きに捉える理事長の言葉がまたよかった。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い相談件数が増えて、いのちの電話がパンク寸前だと言うが、寄付をしやすい方法を考えるなどして、善意が善意を呼ぶような、前向きな循環ができるとよいなと感じた。

○　コロナ禍での人間の絆を考えさせる、非常に有意義な番組だった。ＮＰＯ法人の理事長自身が病気を抱えて苦しまれているということもあり、人の痛みがわかるからこそ、家族に代わる相談相手となることができ、お互いに支え合う関係になれるというメッセージが大変すばらしいと思った。理事長の相談の乗り方がすばらしかったが、それは牧師としての経験によるものなのか、または、カウンセラーとしての社会的な資格を持っているからなのか、人柄から来るものなのか、その背景も知ることができれば理解がより深まると思った。

○　自殺したいと思っている人には、本当は誰かに止めてもらいたいという思いがあるのかもしれないと思った。生きづらさを感じている人に寄り添って、なんとか背中を押していこうとする人の活動は、ほとんどがＮＰＯ法人やボランティアで成り立っており、人の善意に頼って運営されていると思うが、そういった団体を見るたびに行政など公的な支援がされないのか、安定的な運営に繋がるような体制はないのかと思ってしまう。番組で紹介されると、自分もあそこへ行ったら助けてもらえるのではないかと思うような人が、殺到するのではないかと懸念している。ナレーションは落ち着いていてよかった。

○　取材に許可が下りたことに驚いた。ＮＰＯ法人にお世話になっている方々や理事長自身に対しての、取材時やその後のケアがどこまでできているのか、何か悪影響が無かったのかどうか、そこが心配だ。理事長自身が病気を患って大変厳しい立場に置かれている状況で、それを救う人はどうなっているのかという社会的な構図の話にもなると思うが、このＮＰＯ法人と社会との関係性というところが、

番組を通しては見えてこなかったのが少し残念だった。

○　この番組で改めていろんなことを考えさせられた。車の中のシーンは、よく撮影することができたなというのが感想だ。家族も仕事も全て失ったということや、ここに来るまで、頼れる人は１人もいなかったというようなことを聞くとことばにならない。このＮＰＯ法人の理事長自身が病を抱えながら、自殺志願者の人たちのために生きている姿も、軽々しい言葉では語れない。頼る場所のない人をどこでどのように受け入れるのかということは考えていかなければならないが、個人にはせいぜい寄付をするぐらいしかできず、問題の根本的な解決に繋がるわけではないので、無力に感じる。ＮＨＫとしてはこういう真実を問題提起することに大きな意味があると思う。なぜ以前からあるこうした問題を改めて取り上げ、これだけの取材をされたのか、そのきっかけを伺いたい。

○　自殺相談の電話が月 200 件を超えてきており、それも２４時間体制の中で、ＮＰＯ法人の理事長は相当なストレスが溜まっているのではないかと思う。それが病気の進行を速めているのではないかといったことも心配になった。まず助けるという姿勢は、宗教者としての正しいあり方をされており、非常に立派な方だと思った。運営資金については、寄付や献金、それから自分たちでお店を開いて、少しでも稼ぐ方法を学んでいるということなので、さまざまな工夫をされているとは思うが、周りからのサポートはどうなっているのだろうかと気になった。

○　いのちの電話については各地で同様の運動があるが、今回取り上げたＮＰＯ法人の理事長は、自身ががんを抱えての活動ということで、頭が下がる思いだった。

（ＮＨＫ側）

このＮＰＯ法人を取り上げた企画や番組は、今回で４回目になる。2019 年に国が発表した都道府県別の自殺率で、和歌山県が全国ワースト１になったというデータがきっかけだ。和歌山県で何が起こっているのかを知るために、長年いのちの電話の活動をされているこのＮＰＯ法人への取材を開始した。この取材、番組を担当しているディレクターは、月に１～２回はＮＰＯ法人を訪れ、理事長や共同生活を続けていらっしゃっている方々との繋がりを持ち続けて、信頼関係を築き上げてきた。その積み重ね

が、今回当事者の方に寄り添った、説得力のある番組内容になったと思う。

（ＮＨＫ側）

この番組を見て、自殺を考えている人が１人でも減ればよいというねらいで制作してきたが、視聴者の方に伝えるだけではなく、政策や行政に携わる方にどういう形で伝わるかというのは、とても大事な視点だと感じている。このＮＰＯ法人を取り上げることが、かえって負担になるのではないかというところは苦悩したが、命を絶つのをやめるきっかけになればと理事長の意向も確認して紹介することにした。また、今回は共同生活を送る人たちとの関わりで、どのように救われていくのかというところに焦点をあてた。撮影については本人に十分に説明をした上で撮影し、番組で使用する場合にも改めて連絡するなど丁寧に対応した。放送が終わった後も頻繁に、取材させていただいた方や理事長に連絡を取り続けており、良好な関係を保っている。

○　６月２５日(金)の「にっぽんの芸能　次代の幕が開く！　親子でつなぐ　芸の心」(Ｅテレ 後9:00～9:54)を見た。同じ古典芸能といっても、名古屋、大阪、京都、東京では微妙に芸風が違っている。名古屋の狂言を、名古屋で見るという機会も無いので、同じお開きでも芸風が違うということがわかった。日本の古典芸能の多様性を全国で味わえることは、大変よいことだと思う。

東京オリンピックについては開催自体に賛否両論があるが、ＮＨＫ全体として、どのような方針でオリンピックに関する報道を進めようしているのかを聞きたい。

（ＮＨＫ側）

今回のオリンピックは、新型コロナウイルスの感染拡大によりいつもと違うオリンピックになることが予想される。方針としては、多くの競技について、しっかりとその競技の実像を伝えていくということに加えて、アスリートの方々が、新型コロナウイルスと向き合ってきたこれまでの軌跡を丁寧に伝えたり、あるいは、日本や海外のアスリートを応援する取り組みも入れながら、さまざまな工夫をしてお伝えしたい。なお、大阪局でも、近畿地方出身のアスリートの動向などは、しっかりとお伝えしていく。また、大会期間中も、新型コロナウイルスの感染状況等については、ニュースの中で最新情報を丁寧にお伝えしていく。また、災害発生時も同様に対応していく。

（ＮＨＫ側）

大阪局でも、関西の人たちがどんな思いで今回の五輪を見ているのか、東京で開かれている五輪ではあるが地域の人たちのさまざまな思いや考え方を、ニュースの中で伝えていきたい。感動を与えるようなプレーをはじめとして、多角的に伝えていきたい。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２１年6月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、「各局平日１８時台のニュース番組内の企画」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　椹　代表）
黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り
代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）

（主な発言）

＜「各局平日１８時台のニュース番組内の企画」について＞

○　各地のＮＨＫが多様な地域のニュースと情報を扱っていると改めてわかった。神戸局は、新型コロナウイルスに立ち向かう保健所と訪問看護師の話で、短いが内容が濃い企画だと感じた。訪問看護師の方の「握りしめても握りしめても指の隙間から命がこぼれ出ていく」という言葉は、最前線で頑張っている方の危機感が自分たちとは比べ物にならないほど違うと感じ、心に残った。京都局は、話題になる選手の陰に隠れていた元レスリング選手のオリンピックにかける思いが、短い中にぎゅっと込められていてよい番組だった。和歌山局のオープニングは、みかんをイメージしたさわやかでよい映像だと思った。

○　京都局の企画を見た。聖火ランナーを務めた元レスリング選手の、オリンピックに出場するというかなわなかった夢が別の形でかなったことや、支えてくれた周囲の人たちへの感謝、つないできた聖火への思い、指導者としてオリンピックの舞台に立つという次の夢など、短い中にストーリーがまとめられていた。かつて世界の舞台で活躍されたアスリートのその後を追いかける前向きな話題だったが、時間があればもう少し今の活動も取り上げてほしかった。また、京都府の聖火リレーはう余曲折があったが、苦労された関係者の裏側があまり報道されないので、そこがあればよかった。世の中が後ろ向きな状況だからこそ、スポーツや文化が希望や支え合いといった前向きなメッセージを伝えていかなければならないと感じた。

○　コロナ禍で、それぞれの仕事に尽力して社会貢献されている方々の声を取り上げた大阪局の企画は、同じような立場にある視聴者の方を元気づける有意義なものだった。京都局の、オリンピックに選手としては出場できなかったアスリートの思いを伝えるという視点も大事だと思った。神戸局の企画に出てくる訪問看護師の方の「まるで目に見えない戦争が始まっているような、そんな感じがします」という言葉や切実な思いは、歴史的にも重要な証言になるのではないか。コロナ禍とオリンピックについて気になったのは、地方にも海外アスリートのためのホストタウンがたくさんある中で、地元のホストタウンの状況や国際交流のあり方がどうなっているのかという情報も今後発信してほしい。和歌山局の企画は、全国的にも有名なクロマグロ完全養殖の話で、図解も含めわかりやすかった。奈良局の企画では、行基にスポットが当たっていたが、大阪府の歴史とも深く関わっている行基の業績については、府県域を超えて再評価する番組も放送してほしい。大津局の企画は、アメリカの住宅ブームが日本における住宅建設に困難をもたらしているという、グローバルな視点で社会問題を捉えていた。世界的な新型コロナウイルスや経済の状況が、身近な生活にも影響を与えているということを理解するうえで非常によかった。海外の映像を使う際に、もう少し具体的にどこの地域なのか説明があるとよりわかりやすいと思った。

○　大津局の企画はタイムリーな内容で、理解と学びが深まった。木材価格が上がっていることや、戸建て住宅の納期が遅れているといったことを耳にしていたので、自分の生活が世界とつながっていると感じた。ニュースとはこういう気づきのためにあるとも思った。大阪局の企画は、「コロナ最前線からの思い」ということで、

映像が取材対象者の目の部分にフォーカスされており、コロナでマスクはとれないが、それを好機と捉え頑張っていくという意思がそれぞれから伝わってきて、見ている人を元気にすると感じた。他の局が制作した企画も、分野がさまざまで興味深くみることができた。

○　奈良局が取り上げた円形建物跡については、ニュースに出たときも衝撃的だったが、改めてこの企画で見て、歴史的な重要さがわかった。奈良に留まらず日本の歴史的にも、建築史的にも希少な例だと思う。行基の供養を目的とした説もある建造物跡の保存については、考古学や建築史においても大事な問題だと感じており、是非その部分もより深く伝えられる番組を放送してほしい。大阪局の「コロナ最前線からの思い」では、目にスポットを当てているカメラワークが印象的だった。大津局の“ウッドショック”の話では、建築資材の不足については聞いたことがあったが何が原因かは想像していなかった。アメリカにおける郊外移住の増加という説明があったが、巡り巡ってこういうことになっているのが改めてわかった。このコーナーの最後に、この取材は視聴者からの投稿がきっかけだという話があったが、そういう形の取材もよいことだと感じた。

○　神戸局の企画を見たときに、これは何を伝えたい番組なのかと思った。現状に対する行政側の対応の問題なのか、一般市民の気のゆるみに警鐘を鳴らすものなのかがぼやけてしまっている。今は新型コロナウイルスに関する報道が大半を占めているように思うが、一方でオリンピックの開催も控えており、ＮＨＫとしては新型コロナウイルスとオリンピックの開催についてどのような考え方で放送をしているのか、もやもやしてしまった。取材項目や取材対象が多くなったときに、番組としてどうまとめ、発信するかというのが課題だと思った。そういう意味では京都局の聖火ランナーの企画がきれいにまとまっていて、一番心に響いた。奈良局や和歌山局の企画については、地域に根差した情報がその他の地域でも見られることがあればよいと思った。

○　短いが、それぞれに見どころや考えさせられるところがあった。大阪局の企画からは、高校に音楽を学びたくて入学したのにマスクが取れない日々が２年も続いたということから、コロナ禍が長期間に及んでいることを感じた。京都局の企画では、ひとりの相手に勝つことだけしか考えていなかったという選手の本音から、オリンピックを目指す人たちの並々ならぬ激しい思いが伝わった。神戸局の企画では、訪

問看護師の「握りしめても握りしめても指の隙間から命がこぼれ出ていく」という言葉に、これが新型コロナウイルスの本質だと思った。大津局の“ウッドショック”の話では、番組の最後になぜ日本の建材を使わないのかという質問があり、建材の強度不足との答えだったが、これからは自給ということも含めて持続可能な社会を作っていかなければならないと感じさせられた。一本のリポートから社会に問いかけるこのような企画が、地域に対してとても大きな役割を果たしていると思った。各局がそれぞれの企画を審議会の視聴番組とした理由を知りたい。また、地方にも政治や経済があり、農業や漁業に限らず、それらを全国にどう共有するか、問いかけるか、多様性という視点も含め発信することを、検討してほしい。

○　大阪局の企画の、新型コロナウイルスと正面から向き合う３人の女性の奮闘ぶりは、この状況下で他の人がどのような仕事をしているか興味を持たせてくれた。和歌山局が取り上げたクロマグロの完全養殖については３５年かけてやっと商品化できたとのことで、相当な失敗もあったのではないか。光と影として、挫折やうまくいかなかった部分もあった方がよかった。全国各地で毎日のようにこういった企画が放送されていると思うが、他の委員の方からもあったが、今回の審議会になぜその企画を選んだか理由をそれぞれ知りたい。

○　コロナ禍で、思わぬ影響をこうむった方々の奮闘ぶりが良く伝わってきた。特に医療の最前線の保健所職員の言葉に、その職務の重大性とむなしさが凝縮されており胸が締め付けられる思いがした。大津局のウッドショックの情報にも驚いた。

○　神戸局の企画の、訪問看護師の言葉には胸が締め付けられ、医療現場のひっ迫した様子や罹患者やその家族の状況がしっかりと伝わってきた。視聴者たちに自制的な行動を促す効果は大きなものがあったと思う。一方、ふだんから神戸局のニュースは少々新型コロナウイルスの話題が多すぎると感じるので、明るい話題も取り上げてほしい。大阪局の「コロナ最前線からの思い」で頑張っている人たちを取り上げた企画は、いろいろな人たちの頑張りに触れて心にすっと入り込んできたので、頑張っている人たちの特集があれば見てみたい。京都局の元レスリング選手の物語も感動的であり、夢を追いかけ、夢に破れ、再び新たな夢に向かう彼女の姿勢は多くの人に勇気を与えてくれたと思う。和歌山局の串本町の特集はクロマグロの話がおもしろかった。民間ロケット打ち上げ施設の話題をもう少し詳しく知りたいと思った。奈良局の行基の供養塔跡の話も歴史のロマンを感じる内容で惹き寄せられたが、専

門家のインタビューで「民衆の力を借りて作ったというストーリーは悪くはない」というコメントは不適切だった。大津局の“ウッドショック”の話も木材不足の構造が理解できた。この特集は一通のメールからスタートしたとの説明があったが、その姿勢に感動した。

（ＮＨＫ側）

関西では大阪局が１８時１０分から近畿地方２府４県向けの、１８時３０分からは各放送局が各府県向けのニュースを放送している。大阪局から放送している前半部分は、その日の大きなニュースや出来事を取り上げ、現状や課題、解決策について集中的に伝えるようにしており、２府４県のバランスを取りながら放送している。１８時３０分からの後半部分は前半で取り上げられなかったニュースの他に、各地のさまざまな話題、ほっとする話題も取り上げている。大阪局が今回「コロナ最前線からの思い」を選んだ理由は、新型コロナウイルスの厳しい状況や医療の危機を伝えるだけでなく、そのような状況でも頑張っている市民の奮闘をクローズアップすることで、視聴者を元気づけることができる企画として放送番組審議会の視聴番組とした。

（ＮＨＫ側）

大阪局の「コロナ最前線からの思い」は、普段ニュースでは取り上げないような人たちが、コロナ禍でいろいろな影響を受けても前を向いており、自分の仕事にプライドや熱い思いをもっていることをすくいとって伝える、というコンセプトで始めた企画だ。２回目の緊急事態宣言が発出された今年１月から昨日までに、計３８人のさまざまな仕事に携わる人たちに寄り添うような形で伝えてきた。演出については、通常のニュースでは使わない「真正面に向いていただき、笑顔で」撮ることを基本としている。

（ＮＨＫ側）

京都局は１８時３０分からの「京いちにち」で、曜日ごとにコーナーを設けており、今回の聖火リレーについては記者によるニュース企画として放送したもので、タイムリーな企画であるため取り上げた。京都府の聖火リレーは公道ではなく、京都府立京都スタジアムで行われたが、170

人以上の方が参加され、それぞれの思いがつながれた。その中でオリンピックに対する思い、聖火リレーに参加することへの思いが非常に強い元レスリング選手を中心に企画を構成した。聖火リレーがどのような人たちの思いでつなげられているのかということも伝えようとした。

（ＮＨＫ側）

神戸局では、今年度から新型コロナウイルスに関する特集やキャンペーン報道に力をいれている。神戸局のニュースでは、感染者数や病床使用率など数字の裏側にある現場のリアルな姿を多様な切り口で取材してお伝えすることを心掛けている。今回の企画における保健所での撮影や、訪問看護師へのインタビューは、いずれも記者が日頃の取材で関係性を築いたことで達成できたもので、その中でも独自性、ニュース性が高いものを選定した。今後、視聴者に伝えたいことがぼやけないように、番組内のコメントや説明についていっそう工夫していきたい。

（ＮＨＫ側）

和歌山局では１８時３０分から「ギュギュっと和歌山」を放送している。オープニング映像はマイナーチェンジをしてきており、現在は明るくみかんをイメージした映像となっている。和歌山局では地域を満遍なく紹介する中で、より地域の方に届くように、週単位で特定の自治体や地域を取り上げる取り組みを行っているが、その中でも「串本町ウィーク」が、町全体の話題が豊富であり、放送番組審議会とタイミングが合ったため今回選定した。

（ＮＨＫ側）

奈良局の企画については、端的に言って奈良らしい話題であり、近年の発掘の中でも大きなニュースであるため選定した。若い世代や歴史に興味がない方々にも関心を持ち、理解していただくことを目指して作った企画だ。今回のニュースは視覚的にわかりやすくするため空撮や図解、イラストを用いて放送した。行基は奈良にとって重要な人物であり、焦点をあてるとともに、歴史の話題を現代的なテーマとして提示したかった。歴史的遺構の保存と開発の両立は重要な話題であり、今後も多角的に発信していきたい。

（ＮＨＫ側）

大津局の「おうみ発６３０」では、週一回の「しがリサーチ」というコーナーがあり、県内の話題や課題を掘り下げてお伝えしている。今回取り上げたものは、ＮＨＫ ＮＥＷＳ ＷＥＢにある「ニュースポスト」という投稿ページに寄せられた、視聴者からの情報をもとに取材した企画だ。アメリカでは全土で住宅建設のブームが起きており、その影響であることを伝えるために地域を細かく特定せず紹介した。今後、よりわかりやすく伝えられるようにしたい。

（ＮＨＫ側）

それぞれお住まいの地域の１８時３０分以降の地域向けニュースを目にすることはあるかと思うが、それ以外の地域については初めてご覧になった方もいるのではないかと思う。ＮＨＫでは地域の情報を全国に発信していく地域発信の強化を進めている。大阪局では「列島ニュース」(総合 平日(月)～(金) 後 1:05～1:50)を放送しているが、全国の各放送局のお昼のニュースをまとめて放送している番組だ。コロナ禍であることを踏まえると、いろいろな地域のニュースは視聴者の関心が高いと考えている。例えば京都の元レスリング選手が聖火ランナーを務めた話や、奈良の円形建物跡の話はいずれも全国の視聴者に見ていただきたい話題だ。こうした地域情報の発信をさらに強化していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　地域情報発信強化という話を伺ったが、６月１１日(金)の「えぇトコ　知らんかった！緑あふれる「茶源卿」～京都　和束町～」(総合 前 10:15～10:40)や６月６日(日)の「小さな旅　緑の山に至福の一服～京都府和束町～」(総合 前 8:00～8:25)は、それぞれ非常によかった。京都のお茶は宇治が有名だが、産地としては和束町が重要であるということが発信されたのは大事なことだと思う。６月にこの話題を重ねて取り上げたのは、茶摘みや八十八夜などの時期的なものを意識したものなのか。

（ＮＨＫ側）

どちらの番組も、茶摘みの期間は限られており、和束町が観光地としても脚光を浴びていることもあり放送した。

（ＮＨＫ側）

「小さな旅」は新茶の季節である５月に取材をして、放送のタイミングが６月となった。「えぇトコ」とは取材対象や訪ねた場所は違うが、和束町の魅力を全国に発信できたと感じている。

○　最近はＮＨＫの良質な番組の再放送が多いと感じている。コロナ禍で家にいる時間が長いため、アーカイブスからいい番組を再放送していくことは大事だと思う。特に、５月２９日(土)に再放送された「こころの時代～宗教・人生～長崎の祈りー水がめを運ぶ人々に導かれてー」(Ｅテレ 後 1:00～2:00)がすばらしく、いろんな方に見ていただきたい番組だ。コロナ禍という状況下で、どのように心の平安を保つのかという司祭の方の思いが素晴らしかった。古い番組を含めてＮＨＫのよい番組は、どんどん配信していただきたい。放送と配信はライバル関係ではなく、協力関係であってほしい。ＮＨＫとして動画配信サービスとの関わりについてはどう考えているのか。また、配信する番組の選択はどのようにしているのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

現在主要なものとしてはＮＨＫオンデマンドやＮＨＫプラス、ＴＶｅｒなどの配信プラットフォームがある。著作権などの問題もあるが、公共性が高いと判断した番組については、配信を通しても視聴者のニーズに応えようとしている。民間の動画配信業者との関係についても重要な検討テーマになっており、頂いた意見は参考にしたい。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２１年５月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２０年度近畿地方放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。

続いて事前に視聴してもらった、「ＮＨＫスペシャル　追跡“コロナ犯罪”」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　　篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会
　　関西支部副支部長）
　　佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
　　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
　　鈴木　元子（杉本や編集処　編集者）
　　堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
　　矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜ＮＨＫスペシャル「追跡“コロナ犯罪”」（４月３日（土）放送）について＞

○　番組を見て、2019 年７月２７日(土)放送のＮＨＫスペシャル「半グレ　反社会勢力の実像」を見たときと同様に、暗たんたる気持ちになった。実際に罪を犯した人や、その人たちを犯罪に加担させる集団を取材した中身の濃い番組で、オダギリジョーさんのナレーションが重みを与えていた。持続化給付金の不正受給が大学生や主婦にまで広がっていることや、その人たちに「罪を犯している」という感覚がないことに驚くとともに、ねずみ講と同じ構図だと思った。一方、弁護士へのインタビューからは、収入が減少して精神的に追い詰められると正常な判断ができなくなることがあるということもわかり、番組に登場する結婚式場の経

営者のように、社員の雇用を守るための雇用調整助成金の不正受給も、頭ごなしに非難できないと感じた。弱い人たちにつけこむ人や、反社会的勢力をどうにかしないとこうした犯罪はなくならないと思う。新型コロナウイルスの感染拡大が収束しても、再び社会不安が広がれば、また同じようなことが起こるのではという出口の見えない気持ちになった。

○　社会情勢にすばやく反応した有意義な番組だった。単発の犯罪だけでなく、脅され続ける継続的な恐ろしさ、はまってしまうと抜けられない恐ろしさも指摘していた。若者への犯罪防止に関する啓発という意味でも重要な番組だ。番組の中で、オンライン授業になったことで大学生の闇バイトへの応募が増えたというようなコメントがあったが、一方で、オンライン授業によって学習成果が上がっている学生もいるので、「オンライン授業が犯罪につながる」とも受け取れるような表現が気になった。また、番組では犯罪からはほど遠いと思われる主婦たちまでが、不正受給をしたケースが紹介されていたが、どういう動機で犯罪に手を出したのか。生活に困ってなのか、生活水準を落としたくないからなのか、この問題を深く捉えるうえで知りたいと思った。

○　普通の主婦や学生が越えてはいけない一線を簡単に越える状況に寒気を覚えた。「罪悪感がないわけではない」という闇バイトの指示役へのＳＮＳでの聞き取りや、反社会的勢力へ迫る姿勢にジャーナリズムの力を感じた。目を背けたくなるような“コロナ犯罪”の闇を伝えることで、犯罪防止を訴える役割を果たしているのではないか。“コロナ犯罪”に関する相談窓口の二次元コードが画面上にでていたのもよかった。番組全体を通して終始暗い内容だったので、前向きな話題や、救いを感じさせる部分があれば、なおよかったのではないか。

○　今の日本の状況を、緊迫感がある迫り方で伝えるよい番組で、抑えたトーンのナレーションに引き込まれた。情報源である、犯罪組織の指示役に聞く苦労もあったと思うし、丁寧な積み重ねが必要な取材だったのではないか。相談窓口の二次元コードもよかった。比較的簡単な手続きで給付金を申請できることから、不正受給が大量に発生することは容易に想像できたが、ごく普通の主婦たちのランチ会などを通じて、不正受給が広がっていたという事実に衝撃を受けた。今回の番組の内容を広く伝えることで犯罪の抑制、被害の防止につながればいいと思うが、ＳＮＳをうまく活用するなどすれば、若者にも効果的に訴求できるのではないか。エンディング

の黒い模様が広がる演出は、わかりやすく強烈で、番組内容とは別の生理的な恐怖も感じた。途中カラスが映るシーンがあったが、犯罪を扱う番組ではよく使われており、これもイメージとしてわかりやすく、鳥や自然で表現するのはいい方法だと思う。

○　番組の終わり方とナレーションが怖かったが、それゆえに引き締まった番組だった。見終わった後に、新型コロナウイルスの影響で犯罪が増えていくことへの危機感や不安感があった。“コロナ犯罪”は感染に関する情報の陰に隠れている部分でもあるので、社会の課題として取り上げたことはよかった。大人が子どもたちに伝えなければいけないインターネットに広がる犯罪の恐ろしさや、生活者として私たちが“コロナ犯罪”に巻き込まれないようにすることの大切さを教えてくれたと思う。ただ、本当に持続化給付金を必要としている人がいることにも触れられていればなおよかった。前半、主婦たちがランチ会をきっかけとして気軽に犯罪に手を染めてしまうことには、新型コロナウイルスそのもの以上に恐ろしさを感じた。また、逮捕されていない加害者に対するＮＨＫの取材力にはいつも驚かされるが、後半に出てきた犯罪者組織の指示役がいまだ逮捕されていないということから事態の深刻さを感じた。

○　テレビで伝える新型コロナウイルスの話題は、どれだけ死者や感染者が増えているかという感染拡大の話題が多いが、全く違った切り口の番組であり新鮮だった。一般人が犯罪に巻き込まれているという異常事態を知らせる意味で有意義であり、事実関係をよく調べていると感じた。番組の内容というより、犯罪が横行している事実がショックであり、気持ちが重くなった。コロナ禍が巻き起こしている犯罪がテーマだったが、国が矢継ぎ早に出した対策のそもそもの制度設計についても伝えたらよかったのではないか。テレビを見ていると新型コロナウイルスの話題ばかりで先行きが暗いと感じるが、見ている人に希望を与える番組ももっと作ってほしい。

○　番組を見ていてやるせない思いに駆られた。東日本大震災の時も同じように給付金の制度を利用した、被災者をだますような犯罪が多かったが、悪い人はいつでもいるものだと感じた。“コロナ犯罪”がこれまでの犯罪と違うのは、簡略化した手続きで給付金がもらえてしまう制度設計を悪用した犯罪だということ。そして時代の流れなのか、ＳＮＳを使って、人々が安易に巻き込まれてしまうことだ。

前半が不正受給で後半が闇バイトという構成だったが、どちらも新型コロナウイルス感染拡大下で生活を追い詰められた人たちが犯罪に手を染めてしまっていた。警察が主婦たちを取り調べた内容のナレーションが、無理のある関西ことばで気になったが、全体的には、犯罪に巻き込まれないように、被害を受けないように、安易に加害者にならないようにと示唆した、貴重な番組だ。

○　犯罪の手口自体は古典的だが、先が見えない時代の中では、経済的に困っているということもあり、人は一時の欲望に身を任せてしまう傾向がある。インターネットやＳＮＳの浸透によって匿名性が保障されているという幻想があり、それによって「ばれなければいい」などと犯罪に対するハードルが低くなっていることはネット社会の功罪の一つだ。悪い方向に知恵を働かせる人がたくさんいることにやるせなさを感じた。

（ＮＨＫ側）

新型コロナウイルスの感染拡大は１年以上にわたる、かつて事態であり、あらゆる制度で対策が講じられている。そのうちの一つが持続化給付金であり、多くの税金が投じられている。これをねらった“コロナ犯罪”が身近なところまで迫ってきていることをしっかりと取材し、まずは実態を伝えることが番組の第一の目的だ。こうした事態は長く続くことが予想され、今後も新たな闇が発生するかもしれないが、引き続き実態を明らかにして犯罪の防止につなげていきたい。

（ＮＨＫ側）

今回は犯罪や不正にいたる背景の実態に迫ることで、同じことを起こさせないという目的で制作した。また、いろいろな世代の方に届けるため、番組の放送に加え、ホームページでダイジェスト版も発信した。主婦の動機についてはさまざまな背景があるが、その一例として今回の放送では２人の主婦が「軽率な行動だった」と発言した部分を紹介した。映像やナレーションなど表現方法に関する意見は、今後の参考にしたい。

○　つくづく世の中には悪いほうに頭の切れる人がいるもので、持続化給付金と聞き、仕事がなくなる人たちに対しての制度を金儲けに結び付ける悪知恵には驚くばかりだ。もっと世の中のために役立つことに頭を使ってくれたらと願うばかりだ。

＜放送番組一般について＞

○　３月２８日(日)の目撃！にっぽん「京都“おせっかいバンカー”物語」を見た。見終わった後、気持ちが温かくなる、よい番組だった。理事長の話や、意思決定、統率力には説得力を感じた。金融業にもかかわらずノルマを撤廃し、お金の付き合いだけではないおせっかいを大事に、目先の利益を追わない方針は、いわゆる一般的な金融業界とは一線を画しており、その部分をしっかりと取材していたと思う。一方で、どうして京都のこの信用金庫を取り上げたのか疑問に感じた。頑張る個人を取り上げていることは多いが、この規模の事業者を実名で取り上げているのは珍しいと感じる。この番組フォーマットを活用し、頑張っている企業を紹介する企画をシリーズ化したらおもしろいのではないか。

○　番組を見て明るい気持ちになった。番組で紹介されていた信用金庫が、会社の重点方針として地域で街づくりの取り組みを応援していることを知り、うれしくなった。仕事の第一の目的は利益をあげることではなく、困っている人を助けることだと再確認できた。リスクをとってまでも頑張る人や企業を応援する番組でもあり、元気をもらえた。こんな時代でも未来に向けてできることがあると感じさせられて、やる気がでた。

○　新規と既存の顧客の区別なく飛び込みで悩み事を聞く活動はおもしろいと思うし、地域に根付いた信用金庫ならではの仕事だと感じた。番組内で若手営業マンの心情としてコメントされていた「手ごたえがない」という言葉は、信金の利益につながることへの手ごたえなのか、相手企業の商売の後押しになるかどうかの手ごたえなのか、どちらの意味なのかが明確にわからず、違和感があった。全体としてはよい話だが、メリハリに欠けたので、見終わった後の印象は薄い。番組の途中にＢＧＭで使われていたジャズのような音楽が合っていなかったので気になった。

○　新型コロナウイルス感染拡大の厳しい状況の中、地道に前を向いて頑張る人の姿に好感を持った。金融機関も経営が厳しい中、ノルマを撤廃して地域の悩み事のおせっかいをするという経営判断は見事だと感じた。金融機関の仕事はある種

の冷たさを感じるが、家族的で温もりがある姿勢は見ていて安心した。支店でのおせっかいの会議は心温まった。目先の利益より街の長期的な発展を目指すのは実に京都らしく、番組で取り上げられた信用金庫の未来の姿も見たいと感じた。

○　地域密着型の信用金庫として、地域の活性化に貢献しようとする意欲がよく伝わってきた。地方の金融機関で働く人にとって勇気づけられたと思うし、番組では女性職員も多く議論に参加しており、女性参画という意味でもよかった。信用金庫の若手営業マンの謙虚な姿勢には好感が持てたし、音楽もナレーションも内容にあっていた。一方で、成功例としてプラスチック加工会社が紹介されていたが、長い目で見るとプラスチックは環境に負荷をかけるという議論もあり、気になった。放送時間の制約もあると思うが、今回の事例以外にも成功例があれば、取り上げてもよいと感じた。「上げなきゃいけない実績とは何なのか」という、人生に対して間接的な問いかけもあり、非常に深い番組だった。

○　番組を見て救われた気分になった。京都市は以前から財政が危機的な状況にあるが、現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で観光客が激減しており、さらに悪化している。そうした中、地域の事業者におせっかいを焼くという取り組みは、地域密着型ならではで、メガバンクには難しいことだと思う。信用金庫の営業マンが定食屋のメニューまで考えるのかと思い、金融機関の違う一面を見ることができた。業績回復がすぐに見えるわけではないと思うが、地域密着型の地道な取り組みによって地域が元気になってほしいと思える、よい番組だった。

○　心温まる番組だった。バンカーとして働く人たちがこの番組をみてどう感じるのかと思った。時間をかけてもお客様のもとへ足を運んで話をすることは、京都だから、この理事長だから、信用金庫だからというわけではなく、金融業の原点だ。合理化が進んでしまっていて、番組内でも理事長が金融業を取り巻く環境の変化と言っていたが、バンカー自身も立ち位置が見えなくなっているのではないか。新型コロナウイルスやＩＴ化によって今後環境が激変する企業は金融機関だけではない。困ったときは原点をもういちど見直し、時間がかかっても顧客との関係を見直すことが必要になるのではと感じさせられる番組だった。ラストカットの夕日が印象的だった。

○　仕事は現場にヒントがあり、そこに立ち返る態度を理事長自ら示しており、感

銘を受けた。京都は先祖代々から住む人が多い土地柄でもあり、目先の利益を追わずにおせっかいをする方法は、新しいビジネスモデルだとも思う。公共放送であるＮＨＫが企業名を取り上げる際の基準等があれば知りたい。

（ＮＨＫ側）

この番組では、独自の取り組みをしている京都の信用金庫を追った。緊急事態宣言が延長して厳しい状況が続くが、京都局では日々の感染状況やワクチン接種の情報に加えて、新型コロナウイルス感染拡大下の逆境を乗り越えるヒントになる情報も随時発信していきたいと考えている。今回の番組も「京都スペシャル」、「ニュース６３０　京いちにち」の企画といった、取材の積み重ねで実を結んだ番組だ。私自身、地域放送局として地域の人たちのために何ができるかということを、根本から見直すきっかけにもなった。紹介したのは一つの信用金庫の取り組みだが、京都に限らず、金融業界に限らず、あらゆる企業にとって普遍的なテーマを投げかけることができたのではないかと感じている。

（ＮＨＫ側）

今回の信用金庫を取り上げたきっかけは、新型コロナウイルス感染拡大下で、地域がピンチに陥る中、運転資金に困っている企業をどう支えるかということだった。また、さまざまな金融機関がある中で、信用金庫は非営利法人であり、営業範囲や融資先も地域の中小企業に限定されている。最も地域に近い金融機関として中小企業と歩んでいく姿を取材した。長期的には企業も減り、衰退しつつある地方の経済をどう支え、どう一緒に生きていくことができるかが見えてくるのではないかと思っている。ＢＧＭについては、硬くなりがちな金融機関について話を見やすくなるように意識したが、意見は今後の参考にしたい。また、成功例については、プラスチック加工会社以外にもあるが、比較的直近でわかりやすい事例であったので紹介した。

（ＮＨＫ側）

企業名の放送については、ＮＨＫが定めた取材・制作の基本姿勢を記した「放送ガイドライン」に則っている。例えば放送、インターネットの展開で企業名を使う場合、本質的に必要なのか、他の表現に置き換えられないか、視聴者の理解を助けることになるか、ライバル企業などか

ら見て著しく不公平でないか、番組の構成や演出上やむを得ないかなどを、判断の基準としている。企業名を出す場合でも回数を工夫するなど、広告と受け取られることのないようにしている。

○　メガバンクにはないような取り組みで感心した。私の居住する地域にも困っていることを相談すると、自社の顧客を紹介してくれる取り組みをしている金融機関がある。このように地域に根差した金融機関が、番組内の例のように今後発展してくのだろう。

○　４月２７日(月)のよみがえる新日本紀行「浪華芸人横丁～大阪天王寺　山王町～」(総合 後2:05～2:45)を見た。昭和４６年に放送した「新日本紀行」の映像をもとに、昔の大阪の芸人の暮らしぶりを伝えており、有意義だと感じた。

○　５月３日(月)の「みんなパスカる！」(総合 後 8:00～8:45)というクイズ番組がとてもよかった。正解率を競うのではなく、低迷する観光地をどう盛り上げるかといった社会問題を考える過程を楽しむ番組だが、アクティブラーニングのお手本のように感じた。教育的効果の高い番組だと思うので、全国の子どもたちに見てほしい。

○　５月９日(日)のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会「４月の審議から」を見た。各地の放送審議会の様子を番組では初めて見たが、関東甲信越の地域番組や放送番組審議会での議論を知ることができて勉強になった。

(ＮＨＫ側)

各地の放送番組審議会の公表番組についてだが、ＮＨＫでは８つの地域で放送番組審議会が開催されており、それぞれの地域で、毎月第２日曜日に番組審議会の内容を放送している。

○　「ニュース　きん５時」を見た。以前と比べ「ＩＰＰＯＵ」の意味が分かりやすくなった。また、関東でこの番組を見ると、関西ことばが新鮮だったし、大阪府豊中市の話題が興味深く感じられた。テレビ番組は、生活する文脈の中で見ているもので、この番組は関西以外の地域で見るほうが意義ある番組だと感じた。

「やまと尼寺　精進日記」はいつも興味深く見ている。「ウィズ コロナ」の時代に自然とともに暮らす生活が見られる番組で、女性たちが共同で老後も仲よく

暮らすというメッセージも受け止めることができ、好感を持っている。

３月２８日(日)のＢＳ１スペシャル「満州　難民感染都市＜前編＞知られざる悲劇」(ＢＳ１　後 10:00～10:50)、「満州　難民感染都市＜後編＞祖国への脱出」(ＢＳ１　後 11:00～11:49)は、歴史を知るうえで大事な番組だと感じた。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局

２０２１年４月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ大阪拠点放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、「ニュース　きん５時」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　篠　　雅廣（大阪市立美術館　館長）
副委員長　　帯野久美子（関西経済同友会　常任幹事）
委　　員　　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会
関西支部副支部長）
佐伯　順子（同志社大学社会学部　教授）
笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
鈴木　元子（杉本や編集処　編集者）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
矢崎　和彦（(株)フェリシモ　代表取締役社長）

（主な発言）

＜「ニュース　きん５時」（総合　４月２日(金)放送）について＞

○　冒頭で「埋もれた地方の情報をお伝えします」と宣言していたが、愛知のパラセーリングの話題以外は関西の話題だったので、もう少し広く日本各地の情報があればよかった。出演したタレントは情報番組にしては暗い印象に感じた。初回だったからかキャスター２人に硬さはあったが、武田真一アナウンサーに期待している。

○　番組に出演するタレントに関しては、盛り上げようとしすぎず、冷静なコメントがよかった。関西発で、東京とは違う視点から情報発信することは有意義だが、この点を強調しすぎると、東京への対抗意識が目立ち、全国の視聴者には抵抗感

があるかもしれない。「ニュース　きん５時」というタイトルは、「ニュース　シブ５時」を意識してなのか、タイトルの由来を知りたいと思った。また、スタジオのセットは、関西全体の一体感が伝わるようなデザインのほうがよいのではないか。また、番組のテーマソングがヒップホップで若者を意識しすぎていると感じた。また、「ＩＰＰＯＵ新聞」というコーナータイトルの意味がよくわからなかった。

○　武田アナウンサーをはじめとする出演者は、安心感があった。タレントはコメント力が高く、石橋亜紗アナウンサーは落ち着きがあり、笑顔もよかった。「ＩＰＰＯＵ新聞」では、「できないことがある中でプラスをみつけていく。それを見せられるのがパラリンピックだ」というアスリートの生の声が聞けたのはよかった。「夕顔　金曜午後５時の主婦たち」のコーナーは、メッセージとしてはよかったが、ドラマは必要ないように感じた。特によかったのは「ＫＩＮＧＯＺＩＮ」で、９０歳の総務部員の話題からは、元気をもらった。また、「地方の埋もれている情報や個人の話題を伝える」という趣旨の番組だが、関西以外の地方の話題が少なかったので、今後に期待したい。また、大阪弁のナレーションについては、地方色を出す演出はほかにもあると思うので、無理に使う必要はないと思った。

○　楽しく好印象の番組だった。武田アナウンサーは安心感があり、石橋アナウンサーも爽やかでよかった。オープニングについては、テーマソングが金曜夕方の開放感が感じられてよかったが、コーナー紹介の画面構成や、コーナーごとの見出しなど見にくいと思う部分もあった。「ＩＰＰＯＵ新聞」は、「東京とは違う大阪独自の視点で伝える」という趣旨が、今回は感じられなかったので、今後に期待したい。ただ、ＮＨＫの夕方のニュースを見たいという視聴者に対しては、「大阪独自」をコメントやスタジオセットなどで強調する必要はないようにも感じた。「夕顔　金曜午後５時の主婦たち」については、コーナー名から受ける印象がよくないし、夕方の忙しい時間帯に見る内容とは思えなかった。お天気コーナーは気象予報士の塩見泰子さんの明るさと天気図の雰囲気が合っており、気持ちよく見られた。忙しい時間帯なので、各コーナーのオープニングでは趣旨を手短に伝えてほしい。

○　子育て中の母親にとっては子どもにＥテレを見せて家事をしていることが多い

であろう時間帯なので、あまり視聴することにならないと思うが、ニュースと特集の要素があって楽しめる番組だった。「夕顔　金曜午後５時の主婦たち」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で公共施設が閉鎖される中、孤立する子育て世代にスポットをあてていることはよかったが、「ママ友ができない」というテーマについては、もう少し深掘りしてほしかった。「ＫＩＮＧＯＺＩＮ」での、９０代の総務部員の話題はすばらしかったし、武田アナウンサーが地域に出向いて取材することにも大きな意味を感じた。２回目の４月１６日(金)の回を見て、この番組がさらに好きになった。武田アナウンサーは「列島ニュース」によく出演しているが、第一線で活躍してきたアナウンサーが大阪から地方発のニュースを読むことで、ＮＨＫが地方を重視していることを感じた。

○　コンセプトやターゲットがわかりにくかった。いろいろなものが盛り込まれ過ぎており焦点が定まらないように感じたが、ふだん見るものとしてはニュース寄りの番組がよいと思った。大阪局が東京の本部代替機能を担うという観点では、大阪発で地域のニュースを全国に伝えるよりも、「ニュースウオッチ９」などを週に１、２回、大阪局から発信するほうが本来の意味が果たせるように思う。「ＩＰＯＵ新聞」はなぜ新聞に関連づけるのか疑問に感じた。いちばん興味深かったのは「ＫＩＮＧＯＺＩＮ」で取材されていた９０歳の総務部員の方の話題で、何をどういう視点で取材するかを伝えるのが重要だと思った。１時間を超える番組なので、ほかのことをしながら見ることもあると思うが、少し長く感じた。

○　新しい番組で試行錯誤しているのだと思うが、番組の方向性がよくわからなかった。地方のニュースを全国に発信するということだが、関西からの視点にあまりこだわらず、素直に地方の情報を伝えることで日本の多様性を考えるという姿勢でよいのではないか。埋もれている地方の情報をわざわざ掘り起こさなくても、東京の人は地方で当たり前の情報も知らないことが多い。例えば和歌山県白浜町でのパンダ繁殖の実績やワーケーションの成功事例、文化芸術のある町作りを目指して兵庫県豊岡市に開学した芸術文化観光専門職大学などは、全国ではあまり知られていないのではないか。こうした新しい地方の姿を全国に伝えることで、日本各地の多様性をみんなで考えていける番組になることを期待している。

○　「天災や有事における本部代替機能を持つ大阪拠点放送局の意義をアピールする番組」ということについては、冒頭でキャスターが趣旨を説明すれば十分だと

思った。金曜５時という週末の時間帯とはいえ、スタジオセットの棚に酒瓶が置いてあるなど、大阪は浮ついた町というイメージを与えはしないかと感じた。全国の多様なニュースや人々のあり方を大阪発で紹介するということだが、地方のニュースや出来事を選ぶ基準を知りたいと思った。また、番組のテーマソングは、若者を意識しすぎだと感じた。

（ＮＨＫ側）

「ニュース　きん５時」は新たな制作体制で取り組む新番組で、ニュース番組、福祉番組、芸能番組などを担当するさまざまなセクションから得意なスキルを持つスタッフが集まって試行錯誤しながら制作している。今後さらに磨きをかけて、大阪発の全国向け番組を盛り上げていきたい。番組タイトルは、月曜から木曜まで放送する「ニュース　シブ５時」を意識したうえで、金曜日の「金」、近畿の「近」、金メダル級の「金」とかけており、金メダルをあげたくなるような元気ある話題を地方から届けたいという思いを込めた。

（ＮＨＫ側）

金曜日の夕方の番組で、いろいろなニュースが入ってくる時間なので、速報で入ってきたものの中から必要な情報はただちに伝えるようにしている。ニュースの内容については、「日本の多様性を伝える」というコンセプトを今後も大事にしていきたい。

（ＮＨＫ側）

近畿から全国各地の情報を発信する際、地方をどう取り上げるのか、その意味や目的、メッセージを考えながら、番組を制作している。新型コロナウイルスの影響下でロケがしにくくなる中、「列島ニュース」とは違う視点で、どのように全国各地の情報をとりあげるかは今後の課題だ。「ＩＰＰＯＵ新聞」については、「ニュースの一報を一方から見たら」という趣旨がわかりやすくなるよう、次の放送からタイトル映像やコメントを変更した。また、番組のオープニングでは、各コーナーのラインナップもコンパクトに伝えるようにしている。スタジオセットのデザインについては、検討中だ。

○　地域の埋もれた情報を発掘し、全国に生中継で届けるというねらいはすばらしいと思った。そういったねらいの番組だとすると、例えば首相訪米の予定を伝えるなら地域の経済への影響や関係者の意見も知りたいし、台湾鉄道事故を伝えるなら地域の鉄道会社や車両会社との関わりなども知りたいと思った。「ＩＰＰＯＵ新聞」や「ＫＩＮＧＯＺＩＮ」で取材された方については、よく探し出したと感心した。

＜放送番組一般について＞

○　３月１９日(金)のＨＹＯＧＯ＋「もういっぺん“居場所”つくったる～神戸・老舗ギョーザ店　新たな出発～」（総合 後 10:45～11:12 兵庫県域放送）を見た。番組冒頭の印象とは異なり、深みのある番組でじっくり視聴することができた。取材された店に行列ができていることは知っていたが、なぜこの店を取材したのかということや番組制作の意図も知りたいと思った。また、再オープン後の実質的な経営権や店長の立場について詳しく知りたいと思った。新型コロナウイルスの影響下でたくさんの飲食店が廃業に追い込まれる中、外部の経営サポートを受けて存続するスタイルについて詳しく伝えることで、同じような境遇にある人には大きなヒントとなるのではないか。

○　この老舗ギョーザ店は地域の人々にとって必要な居場所だというのがよく伝わった。時間が短かったせいもあり、一度番組を見ただけでは、閉店した理由や店長がなぜ泣いていたのかがわかりにくかったが、もう一度見直すと、閉店のきっかけとなった家族経営の難しさや、支援会社との経営方針の違いに対する店長の葛藤が理解できた。また、閉店した理由に新型コロナウイルス感染拡大による影響もあったかどうかが描かれていれば、見る人に役立つ番組になったと思う。

○　心温まる内容で、このギョーザ店に食べに行きたいと思った。ただ、雇われ店長という立場になっても味を守ろうという、肝心の店長の再出発にかける思いがストレートに伝わってこなかったのが残念だった。タイトルの「もういっぺん“居場所”を作ったる」というのは、店長から常連客へのことばというよりは、店を愛する常連客をはじめ周囲の人たちが店長に向けたことばのように思った。

○　店長と常連客の絆の物語で、「思い出は新しく作っていくもの」「あなたは一人じゃない」といった常連客の励ましなどが心にしみた。新型コロナウイルスの影響で人々の居場所が失われている厳しい状況にあるので、前向きな話題にうれしく感じた。支援会社はしっかりサポートしていると思うが、ビジネスライクに見え、ほかの常連客のぬくもりと対照的でやや気になったので、描き方にもうひと工夫あってもよかったのではないか。店長の思いが伝わるコメントがあれば、もう少し分かりやすい番組になったと思う。

○　小規模の飲食店が、新型コロナウイルスの影響で経営難に陥ることは他にもあると思うので、こうしたドキュメンタリーから、同じような苦難に直面している経営者たちが立ち直るためのヒントを得られれば意義深い。経営を立て直すために、第三者的な視点を入れたということだが、店長が「昔のお店でなくなってしまうような不安を抱えている」とも話しており、支援会社との意見の食い違いや葛藤があったと思う。それを乗り越えて店が活性化したことはとてもよかったと思うが、葛藤や本音の部分がより詳しく描かれていれば、同じような立場の飲食店の方にも参考になったのではないか。また、今回のようなケースが、ギョーザ店に限らず応用できるのか、知りたいと思った。

○　番組で紹介されたギョーザ店は以前から知っていた。１回目の緊急事態宣言後も営業していたと思うが、突然「閉店します」という張り紙が貼られて、本当に驚いた。その後、店が復活することを聞いて喜んでいたが、番組で初めて事情を知った。これからも頑張って続けてほしいと思った。

○　笑顔あり涙ありで、とても見やすい番組だった。神戸市の異人館にある「願いがかなえられる椅子」の場面で番組は始まったが、店長の「お客さんが戻って来ますように」という願いが、切実に表現されていたと思う。家族経営の場合、高齢化や後継者の問題に加え、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、今後経営権を手放す小規模飲食店が増えていくのではないか。支援を受けることで、のれんと店長を残せることはよいことではあるが、店長の「昔の店でなくなる」というつぶやきに現れているように、光と影があるようにも感じた。また、店長への多くの人からの励ましからは、神戸のコミュニティーの力を垣間見ることができた。神戸には、大阪や京都と異なる独特のコミュニティーの力があると思うので、今後の番組でも焦点をあててほしいと思った。

○　新型コロナウイルス感染拡大の影響もあって、外食産業の経営が厳しくなる中、人と人との交流によって再開にまでこぎつけることができたという、人情味あるできごとが描かれていた。一方で、資本面で支えになったとは思うが、経営権を持つ支援会社の人からは、地元の人たちに愛されてきた歴史ある店だということがあまり感じられず、心の半分は温まりながら、半分はやり切れなさを感じた。

（ＮＨＫ側）

番組では、前半で地元の人との絆を描き、後半ではビジネスを通じて立て直していかざるを得ないという面も描いた。新型コロナウイルスの影響下、同じような状況の方々もいると思うので、そうした人たちに対して教訓や助言になるような情報を入れていくということは、今後も意識していきたい。

（ＮＨＫ側）

担当ディレクターが、今回紹介したギョーザ店の再開についての貼り紙を見かけたことが番組制作のきっかけだった。６３年続いてきた老舗のギョーザ店が、地域の人たちの心のよりどころとして愛される場所だったという点を大切にして番組制作を進めた。新型コロナウイルス感染拡大の影響下で飲食店が軒並み苦境に立たされ、店主たちが不安に駆られる中、番組を見た方がこうした飲食店や居場所に関心をもってもらえればという思いもある。神戸のコミュニティーの力など、地域を盛り立てていく力については、継続的に取材できればと思う。

○　ギョーザ店を閉店した時点ではこのような展開になるとは予想できなかったはずで、心温まるエピソードだった。

○　４月１７日(土)、１８日(日)の「第７５回全日本体操選手権」(総合 17 日(土)後 2:55～5:00、18 日(日) 後 1:55～2:55)を見た。ＢＳ１では早い時間帯からいろいろな種目を中継していたが、地上波では後半の種目しか放送していなかったので、もの足りなく感じた。また、複数の種目が同時に行われる競技の場合は、将来的に視聴者が好きな種目や選手を選択して見られるシステムが発達すると、おもしろいスポーツ中継になるのではないか。また、解説は詳しいほうが視聴者には親切なので、

技の難易度や種類などに字幕スーパーを付けるといった工夫をすると、見やすくなると思う。

（ＮＨＫ側）

土曜や日曜のスポーツ中継を総合テレビでどう編成するかについては、「大河ドラマ」の再放送や、「ＮＨＫのど自慢」など定時番組がある中で総合的に判断している。「同時に進行する競技において好きな種目などを選択して見られるシステム」については、現在の放送ではそうした仕組みは難しいが、過去のオリンピックなどの際に、インターネットライブ配信で一部好きな種目を選択して見られるという実験的な試みをしている。

○　３月１３日(土)のザ・ヒューマン「命を描く画家　集大成の絵に挑む」を見た。奈良在住の日本画家である上村淳之さんを２年間にわたって丁寧に撮り続けたドキュメンタリーで、これまで上村さんの絵から抱いていた印象を大きくくつがえされる内容だった。上村さんの絵は幻想的でかわいらしい印象だが、描き上げるまでの過程が想像以上にストイックで驚いた。上村さんが病気を患い、弱気になっていたシーンも印象的だった。撮る側と撮られる側のよい関係が感じられる、心地よい番組だった。

ＮＨＫ大阪拠点放送局
番組審議会事務局